鳥取県八頭郡船岡町

牧野遺跡発掘調査報告書

1980・3

鳥取県八頭郡船岡町教育委員会

序

牧野遺跡は見槻川左岸にある標高90～100mの丘陵地にある。

現況は、西瓜・大根・馬鈴薯・豆類等を主として栽培する農家の主要な畑地であり、年を追って専業農家の減少が進むにつれ、大型機械の導入、省力栽培等の時代の流れの中で、農業振興が最も切実な希願であり、この時に昭和55年度より町営農村地域農業構造改善事業集地区集団農区総合整備事業が計画され、地元農家の協力を得て施行のはこびになり、今回、緊急事前調査を実施する事にした。

牧野丘陵は氷河時代（洪積世）に降下した大山の火山噴出物によりおおわれている。現在では黄色や赤色の土として見えるのがそれであり、表面に薄く黒色の土がかぶさっている。このことから、この丘陵地は古代人が外敵や洪水等の災害から身を守るに最適な場所であり、泥湿でなく、日当りも良く居住に適したところと思われる。

出土遺物には、弥生土器・土師器・須恵器の破片と若干の木炭・鉄器等があり、この丘陵には約2,000年前頃より人間が住みはじめたものと思われる。

今回の発掘調査により判明した遺跡として７世紀前半の円墳（高塚）と柱穴状遺構（住居址を暗示）土壙墓、そして木棺墓（屈葬）が確認されている。その内円墳と木棺墓については本調査に移行して実施、記録保存とし、住居址遺構（Ａ・Ｂトレンチ）については、ほ場整備施行に支障ないので埋戻し保存する事とした。

本事前調査で、これをもって全貌を推定するのは早計であるが、何らかの示唆を与えることのできたのは何よりであり、且亦地域農業の今後の発展を希求するものにとって、未知の文化の研究・保存、並びに地域住民の文化財に対する認識が高まったことと、農業の近代化とを共に喜ぶものである。

なお、調査時期が酷暑の折りに当り、困難を極めたが、終始献身的にご指導いただいた県教育委員会文化課・森田純一（調査指導）、治部田史郎（調査主任）、松下利秀（調査員）の諸氏、並びに作業にご尽力いただいた地元関係者の方々に対して末尾ながら厚くお礼申し上げます。

昭和５５年３月１９日

船岡町教育委員会教育長
西　尾　親　義

例　　言

1．この報告書は、農村地域農業構造改善事業隼地区集団農区総合整備事業の実施に伴なって行なった埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2．調査は、船岡町教育委員会が「牧野遺跡緊急発掘調査」としての国の補助を受け行なった。尚、古墳発掘本調査については町費で実施した。

3．期間は1979年５月14日に開始し1980年３月19日に終了した。

4．調査の実施にあたっては、適宜県教育委員会文化課の指導助言を得た。

5．本書の作成には、森田純一・治部田史郎氏の協力を得て、松下利秀・浦林寿男・田中一男が執筆編集した。

6．トレンチ分布図については町産業課作製の1/1000地形図を使用した。

7．本書に使用した方位は全て磁北を示す。

8．遺物の保管は船岡町教育委員会で行なっている。

調　査　組　織

調査主体：船岡町教育委員会

調査団長：西尾親義（船岡町教育委員会教育長）

調査指導：森田純一（鳥取県教育委員会文化課文化財主事）

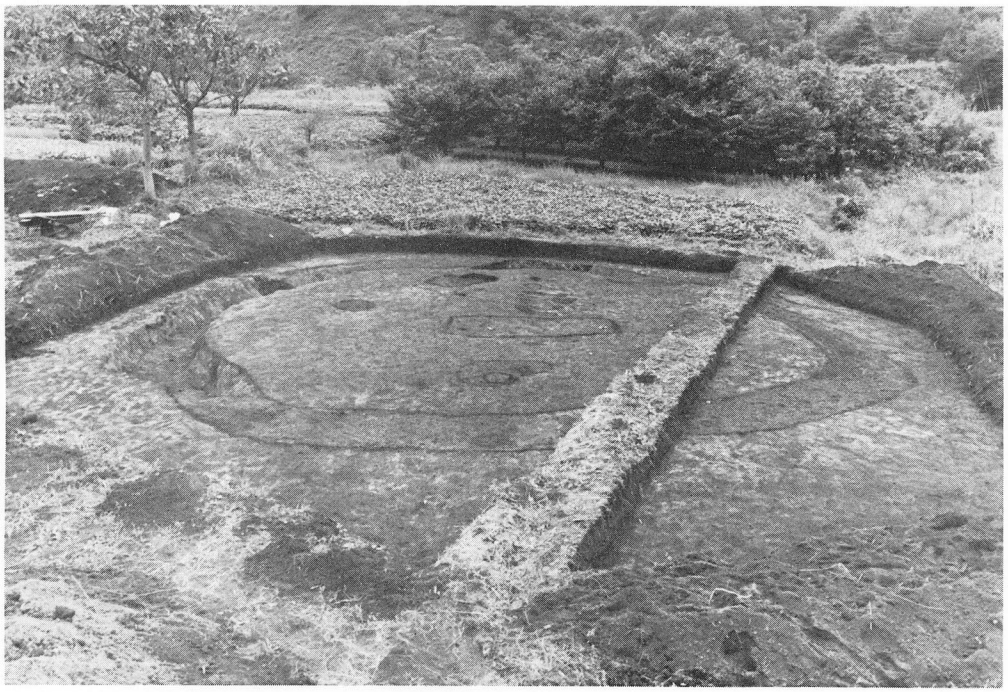
調査主任：治部田史郎（船岡町嘱託）

調 査 員：松下利秀（船岡町嘱託）、木下俊雄、田中登貴男、中家誠次、浦林寿男、西尾政美（以上、船岡町文化財専門委員）田中一男、橋本正太郎（船岡町教育委員会）

作 業 員：岩見一郎、岩成熊治、池本光子、井田春野、木下すみ江、岸田美智子、池本初子、井田たつ子、浦林はる江

事務担当：竹尾雅詮（船岡町教育委員会）、山本正子

調査協力：船岡町産業課



牧野古墳発掘前（東方より）

牧野古墳発掘後（南方より）

目　　次

第Ⅰ章　船岡町の歴史的概要……1

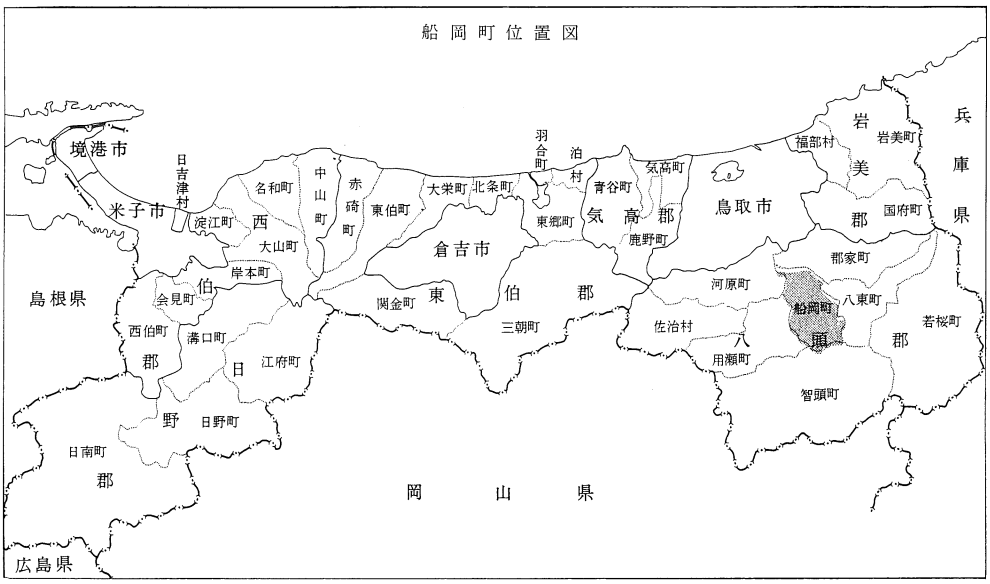
第Ⅱ章　遺跡附近の自然環境……5

第Ⅲ章　調査の概要……8

遺物一覧表……24

遺物実測図……28

あとがき……38



第Ⅰ章　船岡町の歴史的概要

和名抄（承平年間 931～ 937）に八上郡大江郷と出て来る船岡は、大江郷と佐尉郷に、隼は、日下部郷に含まれていたのであろう。又仁寿元年（851）大江神社、塩上神社に従五位下が綬けられている。貞観元年（ 859）大江氏雄が大江神社を再建している。

中世の頃、水口奥に大江谷地頭の伊田氏（後に国侍）が半柵城を築き大江谷と船岡、隼の一部を配下におく、又隼に波多野氏（日下部、安井、大門、隼）が福井部落南に高平城を築き隼も配下にあった。この両氏の間には合戦した記録も口碑もないが延文５年（1360）主護職山名時氏、師氏について伊田氏、波多野氏は将軍義詮に叛き京に攻上っている（敗走）応仁の乱の時には、国侍伊田、波多野両氏は山名氏について京に攻上り11年戦乱に明くれる。秀吉が播磨より因幡に攻入ったさい半柵城主伊田氏は秀吉のため陥り丹波に走るこの時、下町観音堂、小岩寺、法念寺、幸賀ノ宮、大臣神社、野々宮神社等焼打に合う。

近世になって、池田光政の臣(家老？)丹波山城守が丸山に城を築き船岡を統治する。この頃八東郡の年貢その他の生産物運搬の為に舟川を作る（才代中村家初代開鑿)。又、交通の要所として船岡は栄え年２回の市もたつようになる。寛永９年（1632）国替となり池田光仲の家老乾氏の知行所となり栄える。（船岡には牢屋、御制礼所もあった）船岡（字船岡新部荘谷）には、６代～11代までの乾氏の墓がある。

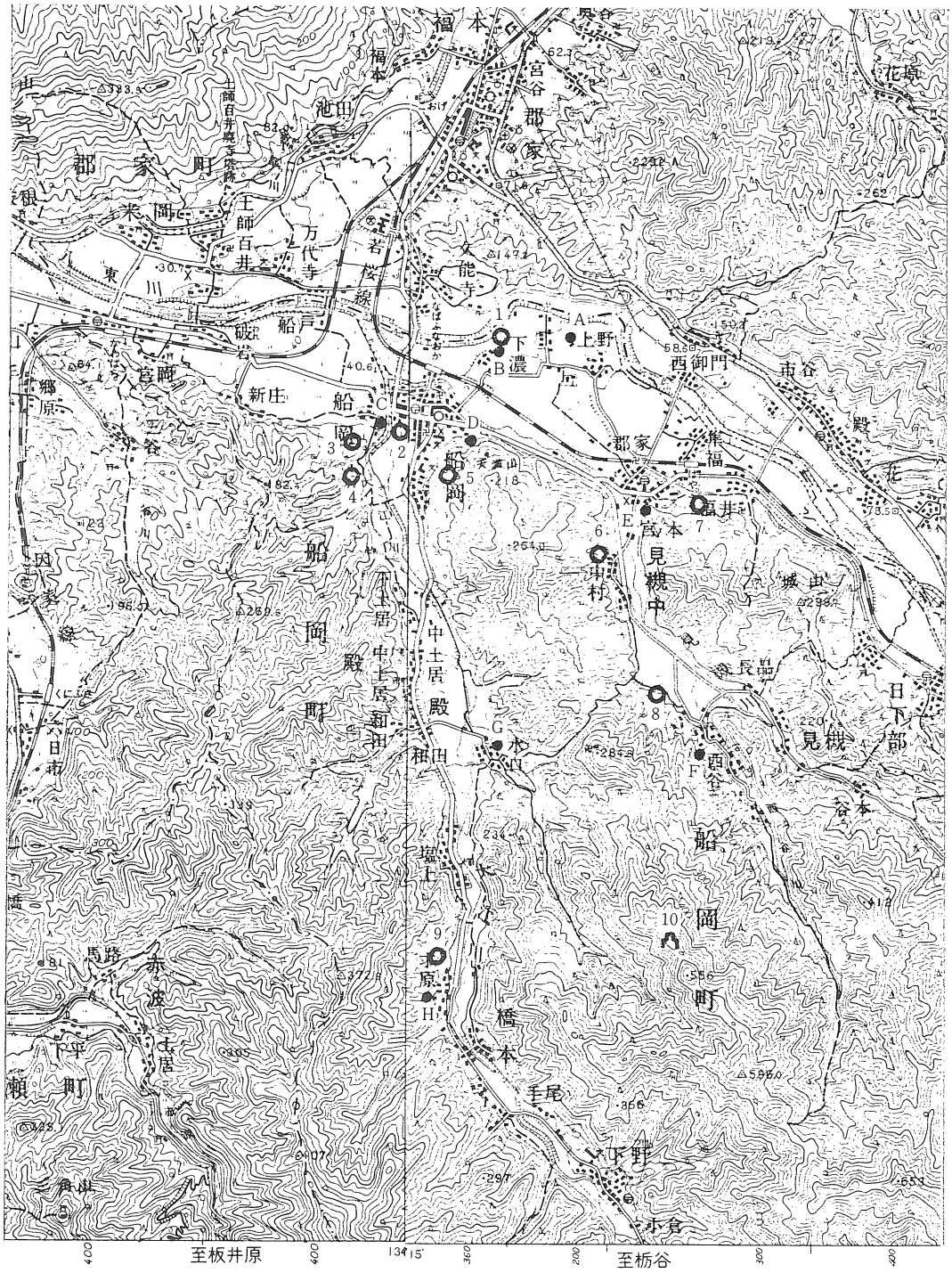
近代になって、伊井田村、大江村（大正７年合併して大伊村）船岡村、隼村となる。昭和27年、大伊・船岡・隼・各村合併（昭和25年人口 6,581人、30年 6,591人）して船岡町となり今に至る。（55年３月現在 5,091人）

１　梨ノ木古墳（下濃字梨ノ木）

現状は果樹園になっているため墳丘、石棺共破壊されていて現存しないが、地主の話しによると、地下約１ｍの所より平な川石を利用して南北に約２ｍ程走り巾40cm程の石棺と思われる様な遺構があった。石棺内には川砂が入れてあった。天井石は５～60cm×１.2m 程度のもの数個、その他石室と思われる所より須恵器、土師器多数。（６世紀頃のものと思われる、現存する須恵器３点は町中央公民館に保存する）金環３個の出土があったが現存しない。隣接地に、「奈免羅」と云う所があるがここも須恵器、土師器の散布地である。

２　下荒神古墳（坂田字奥ノ土居）

猛宗竹におおわれているが、上部に盗掘の跡がある、墳丘の下部に荒神様があり、土師質の土器片が散在する。墳形は「方墳」であり、29m ×22m で町内では一番大きな古墳である。町誌によれば、大正の頃盗掘されたが、その時、鏡・刀・土器等が出土したが今では不明である。石室は、川石で崖を作り１ｍ程度の高さであった。蓋石は附近の人が石橋に使っていたが今は不明である。



①梨ノ木古墳　⑤大平谷古墳　⑨橋本遺跡　(C)下船岡神社　(E)隼神社　(G)水口神社
②下荒神古墳　⑥栗坪古墳　⑩半柵城址　(D)上船岡神社　(F)西谷神社　(H)大江神社
③丸山遺跡　⑦福井古墳　(A)野々宮神社
④神明古墳　⑧牧野遺跡　(B)下野神社

注－1　○は遺跡を示し、●は神社を示す。
注－2　国土地理院発行1:50,000地形図「鳥取南部」「若桜」図幅より抜粋。

挿図－1　船岡町遺跡分布図

3　丸山遺跡（船岡字丸山）

須恵器・土師器の散布地で、土師器には糸切底じきのもの又、杯の小片など丸山を中心として、東平、北平、北西平の畑に散布している。又昭和54年町保育所建設中敷地内より円筒埴輪破片が多数発見され町中央公民館に保管している。（55年度調査予定）

4　神明古墳（坂田字神明）

山道のために墳丘の裾が平になっているが墳形は円墳である。全長11.5m 、高さ上部で20cm、下部で 1.8m である。この墳基下方の志保谷道で、大形の瓶と思われる須恵器片を採集中央公民館に保存している。又附近の畑より小数の土師器片の散布を認める。

5　大谷平古墳（坂田字大谷平）

封土の半分を失いながら遺存している。石室上の封土は取り除かれており天井石の一部が露出している。墳形は円墳で、全長12.5m 、高さ、上部30cm、下部 180cm、石室は南北に作られており長さ、 220cm、巾 153cm、高さ150cm、石棺は55cm×173cm×40cmである。内部構造は墳丘中央にあり横穴式石室（片袖）で南に開口、出土品は、直刀１、長さ60cm、柄 8.8cm、刃巾 3.7cm、刀子１、長さ９cm、鉄鏃13ヶ以上、長さ13.2cm、須恵器（高坏、坏、壺、提瓶ほか）その他不明鉄器あり、船岡小学校に保管している。７世紀前半の頃の築造と推定される。

6　栗坪古墳（見槻中字栗坪）

露出して石が現われている墳形は円墳である。字屋敷田からも水田耕作中に須恵器片等を発見している。又附近の畑から土師質の坏の一部と思われる小片等も発見されている。

7　福井古墳（福井字西岡）

現状はヒノ木の25年生におおわれているが墳形は円墳か方墳で墳丘のすぐ下（北側）に舟川が通っている。（昔高瀬舟が通った枝川）全長12m 、高さ 1.5m

8　牧野遺跡（西谷字牧野）

今回の発掘調査の所である。現場はゆるやかな斜面を切開いた畑地に遺物が多数散布している。西側の堤の工事の時にも土器が出土している。昭和51年調査の時すでに、複合口縁を持った古式土師器の壺片、櫛描文土師器片等を採集しており（町教委保管）、生活に適した場所でもあり住居跡の存在が予想される。尚、昭和55年度より、遺跡を含む付近一帯が、総合整備事業予定区域となった為、今回の調査が必要となった。

9　橋本遺跡（橋本字宮ノ下）

果樹園開墾中園内の中腹の小段地より壺出土、中世の墳墓地かと思われるが断定は出来ぬ。出土地は表土に河原石を敷いていた。胎土は、砂まじり固い焼成表面、赤褐色、内面青灰色、底部に穴がある。壺高32.5cm、径30cm、底部径16cm、（橋本、大谷具己氏保管）古備前焼に類似しているが蔵骨器で墳墓ではないかと考えられる。又大江神社鳥居下手の畑中で古備前焼の破片が少々散在する。

大江神社々務所西側で、明治２年、土蔵建設の為土を平にしていた時土中より梵鐘出土。

梵鐘銘

因州小畑郷緑御宮堆鐘也

康正三年天$_{T}$丑十月九日

大願主　北村宗次

用瀬地下金屋

大工　藤原重家

現在は町内多宝寺に保管されているが古鐘としては県下でも有名である。

１０　半柵城址（水口字滝ノ奥）

水口奥山で 550m の頂上にあり、大江谷の地頭伊田氏の処城である。東側には馬かくしと云う地名も残っている。又尾根伝いに出城である鉢伏城、幡ヶ谷城へと続いている。松尾城、丸瀬城等多くの出城をもつ大城である因幡誌によると北西が表である。

第Ⅱ章　遺跡附近の自然環境

八東川支流、見槻川の左岸に位置する牧野丘陵は、千代川河口より約24km、海抜90～ 110m の所にあり、見槻川との比高は約10m 、丘陵下位の谷底平野とは約２～３ｍの比高をもって明瞭に区分される。

牧野丘陵の基盤は凝灰角礫岩であり、この上部の厚さ130～150cmは赤色風化を受けている。この基盤岩の上位には、層厚約４ｍで大山降下火山灰が被覆している。

また、この丘陵には二条の埋積谷があり、Ｃ・Ｄ・Ｉ・Ｈトレンチをいれた東側の埋積谷には二層の黒褐色腐植質土層を見る。Ｆトレンチ東方で畑地断面を見ると、上位のものの上限は表層から10cmにあり層厚７cm、色調５ＹＲ⅔～⅔であり、下位のそれは表層から32cmに上限があり、層厚約24cm、色調 7.5ＹＲ¾～⅘を示す。構成物は表層から下層まで同質であり、粘土（ローム）と小～中亜角礫より成っている。

この埋積谷での遺物包含層は、上位の黒褐色腐植質土層であり、古いものとしては、Ｈ・Ｉトレンチで弥生後期から末期と考えられる土器片が出土している。また、Ａ・Ｂトレンチのある埋積谷では、現在より小型と考えられる成牛の歯が出土している。

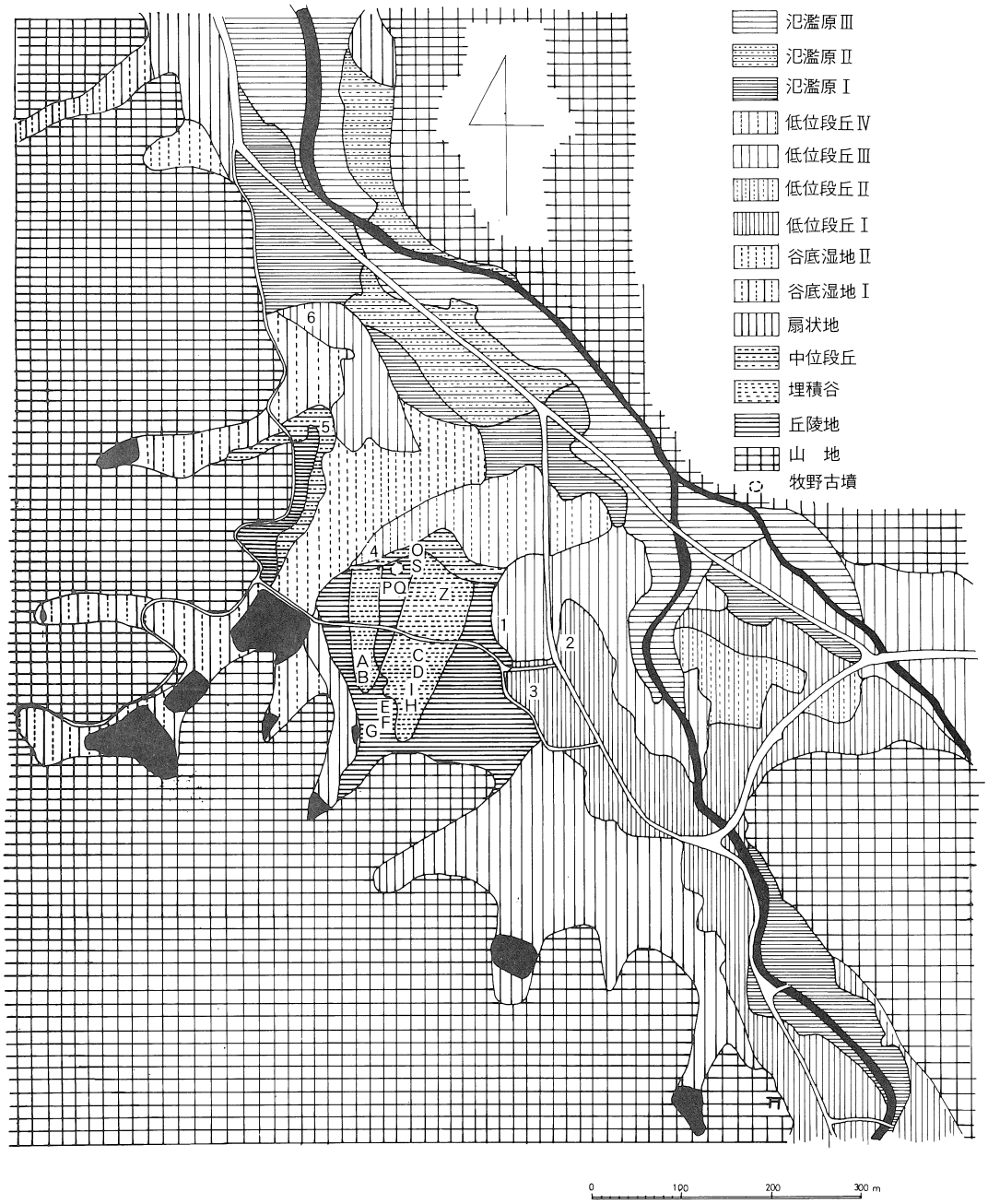
以上の事からこの丘陵の埋積谷が安定した時期は、遅くとも弥生後期頃と考える事ができる。従って、牧野丘陵は弥生後期以後の人類にとって居住に適した地域であったと考えられる。

丘陵下位の谷底平野では、微地形分類図の地点番号１～５で６～７世紀の須恵器片を、ほ場整備の為の表土除去後、水田の床土の層相より確認しており、地点６のところでは、杉の埋木を確認している。埋れ木は10数本の立木と思われ、層相は２ｍ以上ある泥炭であった。この泥炭層の上位には層厚約２ｍのローム・角礫層（二次堆積物)があり、その上位は水田となっていた。

従って、古墳時代後期には居住地域は牧野丘陵のみならず、下位の谷底平野のなかの泥湿ではない所も居住していたものと考えられる。そうした中で、７世紀初めの築造として考えられる牧野古墳の立地を見ると、古墳時代後期から末期には、その居住空間の中心は丘陵下位の谷底平野であったかも知れぬ。そして、弥生時代後期から末期のものと考えるＦトレンチの土壙墓表層より出土した須恵器の壺の意味するものも、古墳時代後～末期の居住地としてより、聖域としての性格の方が強かったのではなかろうか。

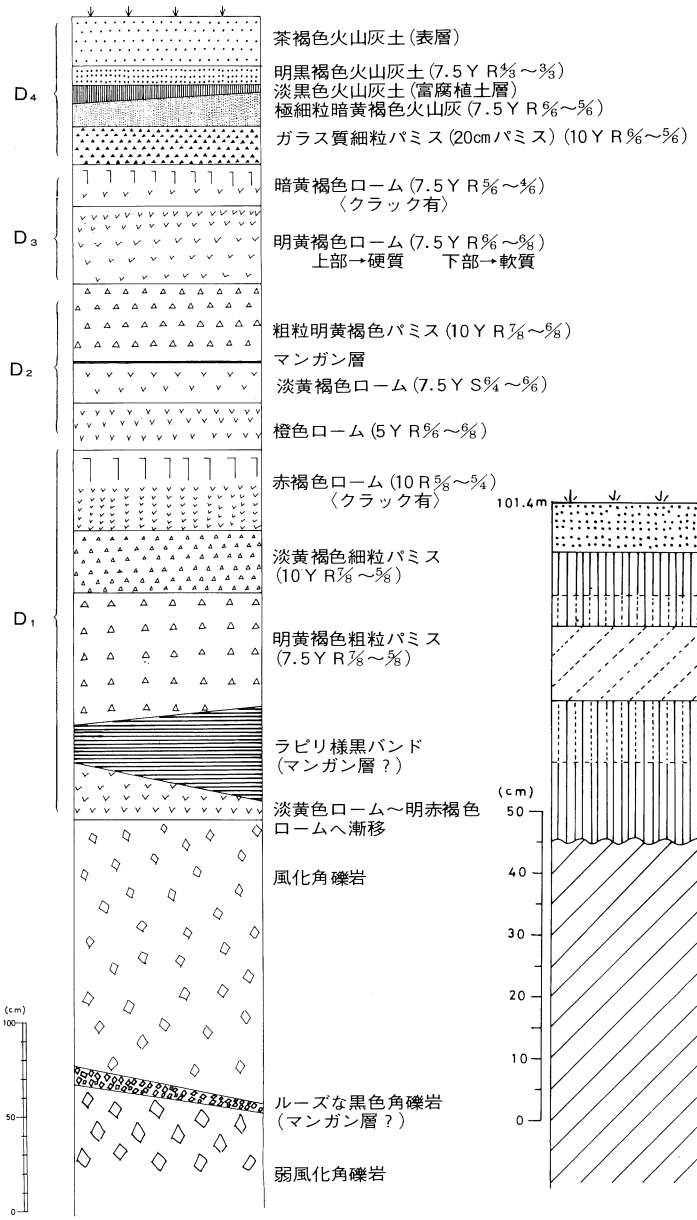
また、Ａ・Ｂトレンチで出土した中世の土鍋により、不明確ながら、居住地の移動を見る事が出来る。つまり丘陵・埋積谷（弥生後～末期）から谷底平野（古墳時代後期）へ、そして中世に丘陵地域へ。

狭少な地域の、小規模な調査により推論する事は危険ではあるが、ほ場整備事業の波の中で後世に伝える為、敢えて記述しておきます。



注）図中のアルファベットはトレンチの位置を示し、数字は遺物散布地を示す。

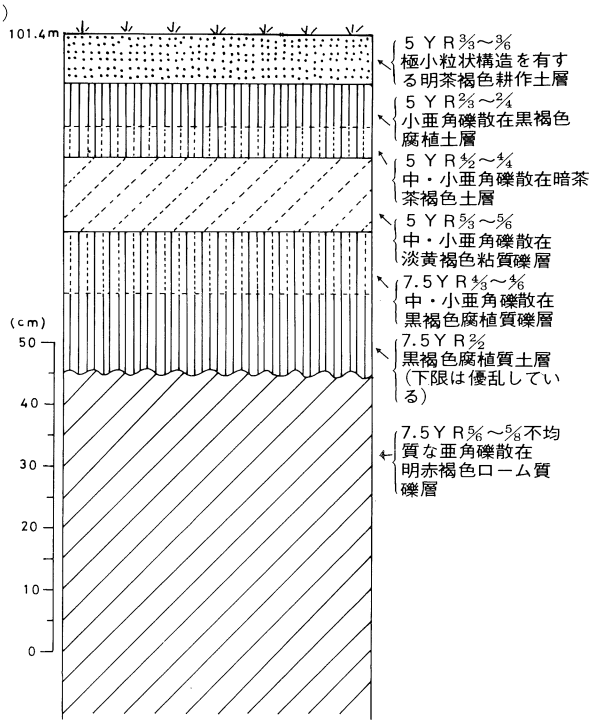
挿図－２　牧野丘陵周辺微地形分類図



注－１　色調については新版・標準土色帖（1967）：小山正忠・竹原秀雄編著を使用した。

注－２　D4 －大山上部火山灰
D3 －大山中部火山灰
D2 －大山下部火山灰
D1 －大山最下部火山灰
を示す。

挿図－３　牧野丘陵表層地質柱状図



注）全層相に粘性があり、ロームと角礫岩を主としている。丘陵の埋積谷構成層である。

挿図－４　牧野丘陵Ｆトレンチ東方畑地地層断面図

第Ⅲ章　調査の概要

当初のトレンチ設定は牧野丘陵にある二条の埋積谷のうち、東側のものが中心に設定されたが、その後、地元の人の情報により西側の埋積谷、そして二条の埋積谷の間の微高地を設定した。

Ａ・Ｂトレンチ（挿図－８・９を参照）

住居址を暗示するピット様遺構を確認したが、不充分ながら埋戻しと決定した。

遺物は土鍋３、壺又甕９、平底型土器片４、等であったが、完形品はなく破片ばかりであった。

Ｃ・Ｄトレンチ（挿図－10・11・12・13・16を参照）

計測可能な遺物はC_1、C_2トレンチで出土した壺、甕の二点であり、その他の破片も少数しか出土しなかった。

遺構らしきものは発見できない。

Ｈ・Ｉトレンチ（挿図－14・15・16を参照）

遺構は未発見なれど、Ｈトレンチ西隅に現われた巨石の解釈は、巨石の少ない丘陵地であるだけに注意を要する。

遺物は多数出土したが、主に土師器片であり、少数の須恵器片と弥生土器片が出土している。又、石刃、砥石、ミニ石斧各１点がある。

Ｅトレンチ（挿図－17・18を参照）

遺物は皆無。遺構として土壙状のものがあるが、詳細不明。このトレンチの表土は薄く遺構の土質も角礫岩であり、時期等不明。

Ｆトレンチ（挿図－17・19を参照）

西半部は基盤岩の丘陵頂部、東半部は埋積谷であった。この中央付近に土壙墓があり遺構内の土質は黒褐色を呈するが、基盤岩と同質の角礫岩であった。内部より平底型土器が出土し、土壙直上には須恵器壺が出土した。弥生土器と考える平底型土器片と、７世紀前期と考える須恵器壺との相関が問題となる。

東半部の埋積谷からも土器片が出土したが計測不能。

Ｇトレンチ（挿図－17を参照）

表土は、10～15cmとＥ・Ｆトレンチと同質であり、直ぐに基盤岩となる。

遺構、遺物は皆無。

Ｏ・Ｓトレンチ（挿図－22を参照）

ピット状遺構を確認するが、遺物は未発見であった。又、Ｏトレンチの西隅とＳトレンチの東部で土壙状遺構を認めたが、遺物が皆無の為、不明確。

Ｐトレンチ（挿図－20を参照）

平板実測図内の(1)(2)はローム層を掘り込んで、ローム質角礫岩が充填し、深さは表層から約150

cmであった。(3)は焼土であり、全体として遺物は皆無に等しい。

Qトレンチ（挿図―20・21を参照）

平面実測図内の(1)から刀子が出土したが遺構とは考え難い。(2)は焼土、(3)は供献用の須恵器坏であり完形品であった。(4)は土壙墓。その他の遺物は皆無。

牧野古墳（R・Tトレンチ）

Rトレンチ試掘時、遺物壺（40）・高坏（44）が出土し、その両端に落ち込みを確認した。そこで、その南方約1mにTトレンチを設定し落ち込みの性格を追求したところ、Rトレンチの落ち込みに連続する弧状の黒褐色腐植土層が、地表下15～20cmで大山上部火山灰層の20cmパミスを切って現われた。これを円墳の周溝であると断定し、仮称、牧野古墳とした。

Tトレンチ東半部周溝上での遺物は壺（41）・壺（42）そして計測不能な須恵器片、土師器片が数点であった。その他の地点よりの出土として遺物高坏型土器(43)があるが、古墳全体として見た場合、円墳の周溝南半、特にTトレンチよりの遺物数が著しく多かった。その為、周溝に副葬品を入れる際には、主体部の南方に相当する所に入れたものと考えられる。

円墳主体部の長軸は、磁北より西に約34°傾いており、長さ3m、幅 1.5mの長方形をしていた。この主体部の遺物として、遺物坏蓋(38)・坏(39)・ 鉄鏃(61)・ 尖頭器型石器(58) の4点がある。遺物38・39の土器は黄橙色を呈してはいるが、焼成の悪い須恵器と考えられ、塑形作製の手法として〝五～六段の右回り粘土紐巻きあげ〟の手法が取られており、型式的にも7世紀初期のものと考える。

遺物61は、身厚3mmの有茎二翼の鉄鏃であり、実用品と云うよりも宝器的性格のものと思う。遺物58の石器は、片面が自然円磨の状態で、他面は第一次剝離の尖頭器型をしている。この為、石室あるいは石棺の一部分とは考え難く、またそれを示す根跡も見当らなかったので、組み合わせ式又は竹釘を使用した木棺であったか、直葬したものと考える。

主体部の深さは、南端部で地表下35cm、北端部で30cmが残されており、表土削除後（主体部を確認した時）には底の10cmだけを残す状態であった。この主体部は20cmパミスの上半約10cmを切り込んでその床面としていたが、P・Qトレンチ等、周囲の地層から見て、20cmパミスの上位にくる円墳築造時の地層の厚さを推定すると、多くとも50cm以下であったと思われる。従って、円墳主体部は、当時の地表より60cm以下の深さに掘り込まれ、その上に盛土がなされて埋葬されたものと判断する。（挿図―5・6を参照）

円墳の規模は、南北内径10.7m、南北外径13.5m、東西内径10.4m、東西外径13.0mであり略真円に近い。周溝最大幅は 160cm（この数値は20cmパミス直上での幅であり、円墳築造時の幅はこれよりも広い）、周溝最少幅 110cmを測る。また、周溝の深い所で44cm（南部）浅い所で20cm（北部）を測るが、築造時の周溝の深さは、南部で約90cm、北部で約70cmであったと推定する。この円墳自体が緩やかに北に傾く丘陵地を利用しているが、周溝底も同様に南半部が少し高く、北

半部が低くなるように掘り上げられているので排水についての考慮がなされていると云える。周溝の側壁は弱い凸面の急斜面であり底幅は45～70cmの平面をなすが、全体としては底の平らなU字型をした周溝断面である。（挿図―23・24を参照）

その他の遺構として、平板実測図の中に示した(1)(2)(3)(5)(6)(11)のピット状遺構があるが、これらの中からの出土遺物は見られなかった。只、これらピット状遺構が円墳周溝を切っている事より円墳築造以後に形成されたものと考える。そして(4)より出土した木棺墓が(3)のピット状遺構を切っている。従って(1)(2)(3)(4)(5)(6)(11)の遺構が直接的に円墳と関係あるとは考え難い。しかし(10)の焼土（130×60×40cm）については、主体部出土の焼成の悪い坏、坏蓋との相関を考える必要があり、又、黒点で示した20×30×30cmの富腐植土穴も、その配列状況から要注意の遺構である。

次いで、平板実測図の中に示した(4)地点より出土の木棺墓について、現在判る範囲を記述しておく。

木棺墓出土地点は、Rトレンチと Tトレンチとの間に当った為に円墳本発掘中に出土するまで予期できなかった。木棺墓と断定したのは鉄角釘が出土したからであり、この角釘は上・中・下・最下の四層準に分かれて出土した。その出土状況及び地層断面より、木棺の大きさは長さ約70cm、幅約55cm、高さ約85cm前後と考えられた。（挿図―25を参照）

角釘は上段より５本、中段より７本、下段より10本、最下段より17本（１本を２本分に数えている可能性がある）が出土し、各段より比較的保存の良いものを１本づつ選び実測した。最長釘の長さは 7.5cmを測り、その断面は長方形であるが、釘頭が楕円形をしており船釘と同様の特徴をもっている。また、保存の良い釘に限って釘の上半部が曲がっている事も特色である。この他に木棺が二重になっていたとも考えられる位置からも、２本の釘が出土したが、副葬品はなく、木棺木材の厚さ・材質も不明である。

遺骨は頭骨と１本の鎖骨は判断したが、その他の骨については浅学の為に不明である。

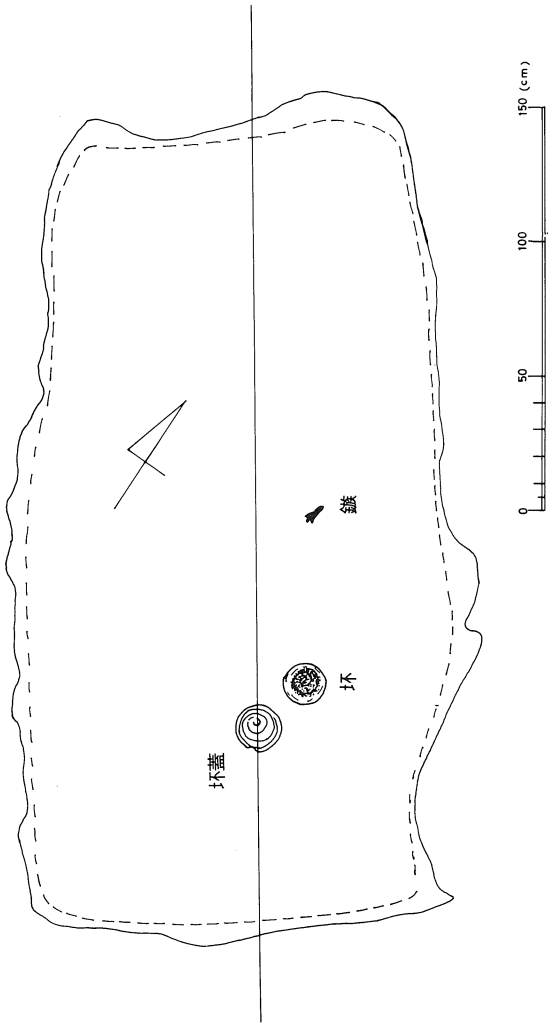
頭骨の保存状態は比較的良好であり、可能な限り実測を敢行した。単位―mmの実測なので誤差も大きいと思うが、その特徴として、頭の型は長頭型、顔の型はコルマン示数より高上顔型、ウィルヒョウ示数より広上顔型に属し歯槽側面角より突顎であったと考える。歯並びは非常に良く、左上顎骨で１～８番までの歯を全て確認できる。左下第一大臼歯が抜けてはいるものの、歯の磨り減り方は少なく、咬み合わせは鋏状である。（挿図―26を参照）

右顔面は、木棺底に接していたため保存状態が悪かった。歯・骨ともその断面は食パンの断面の如く間隙が出来ており、色調も食パンのようであった。埋葬位置が円墳周溝の内側に接する位置にあった事、大山上・中部火山灰を掘り込んで埋葬していた事により地下水の影響が少なかった事が、この木棺墓の保存を良好にしていたものと判断する。

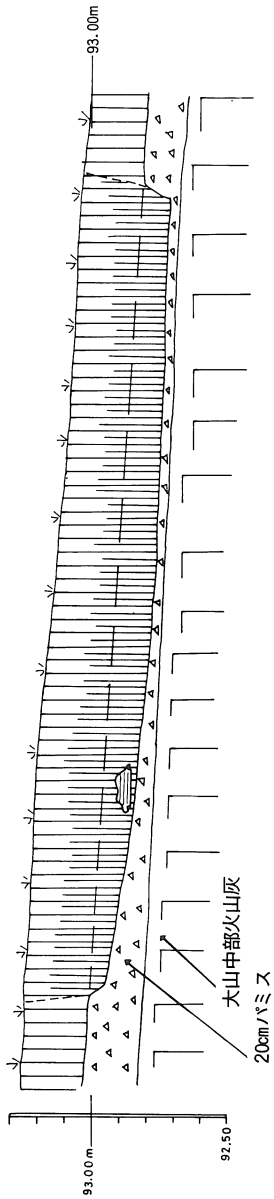
ともあれ、この木棺墓の埋葬時期は、円墳築造後に形成されたピット状遺構よりも新期のものであり、埋葬方法は屈葬、そして、被葬者は第三大臼歯（親知らず）がある事と歯の磨耗が少な

い事により青年であろうと推定される。

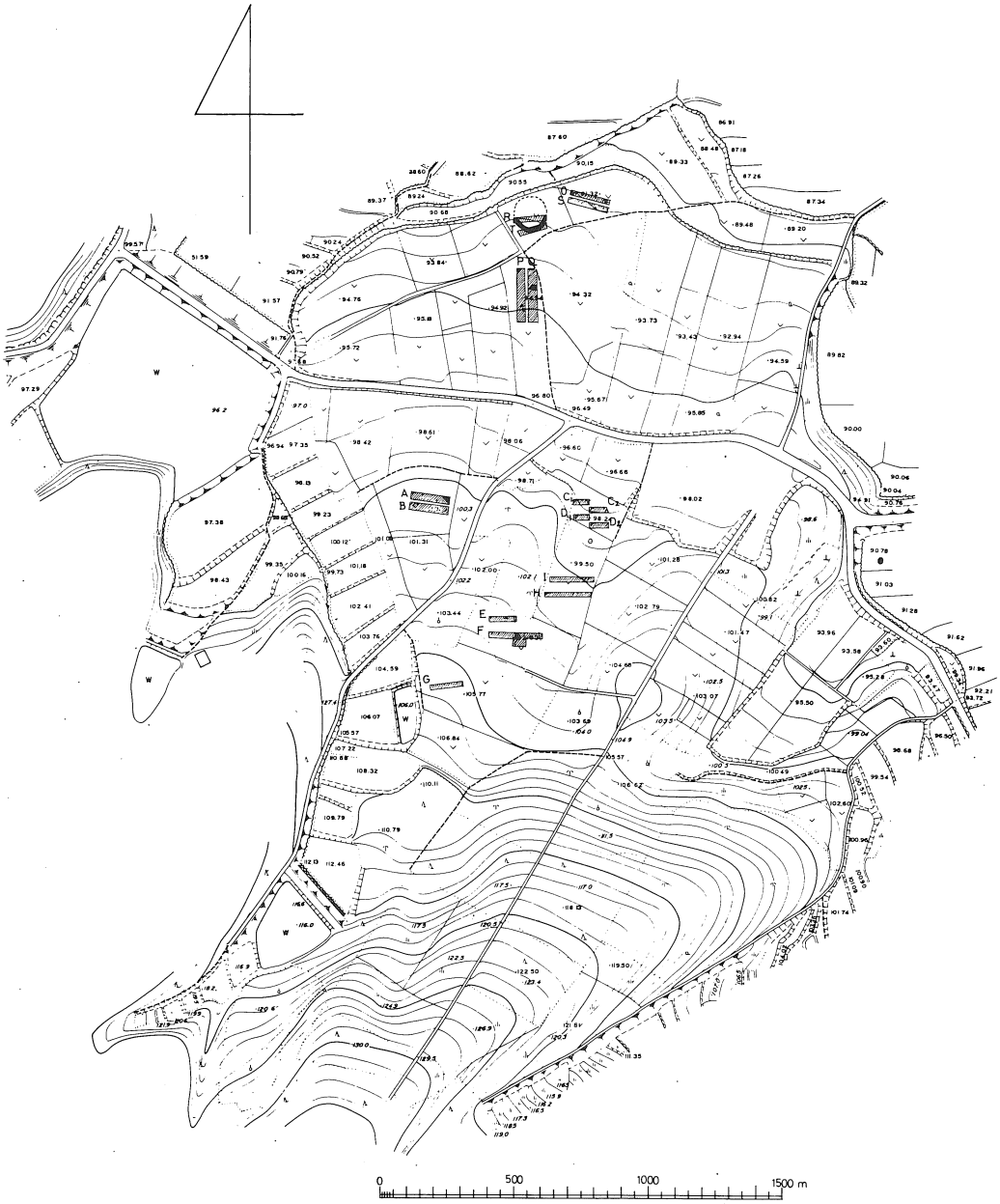
以上、牧野古墳は大山降下火山灰によって被覆される、日向斜面の牧野丘陵稜線部末端に立地し、下位の谷底平野を瞰観するに最適の条件と遺物保存に適した環境の地に位置している。ゆえに牧野古墳を築造した人々の居住空間は丘陵下位の谷底平野であったとも考えられる。



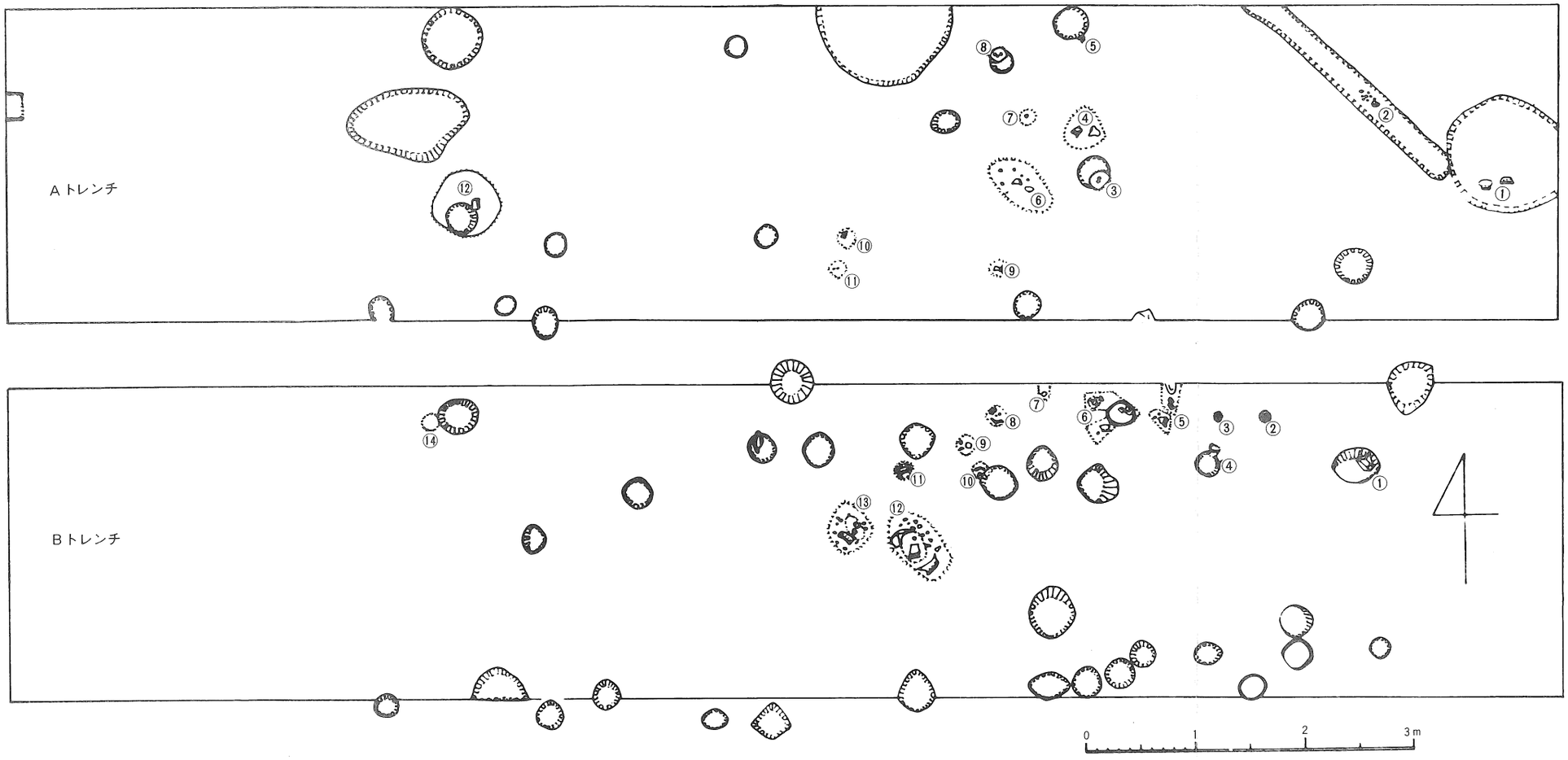
挿図－５　円墳主体部遺物出土状況図



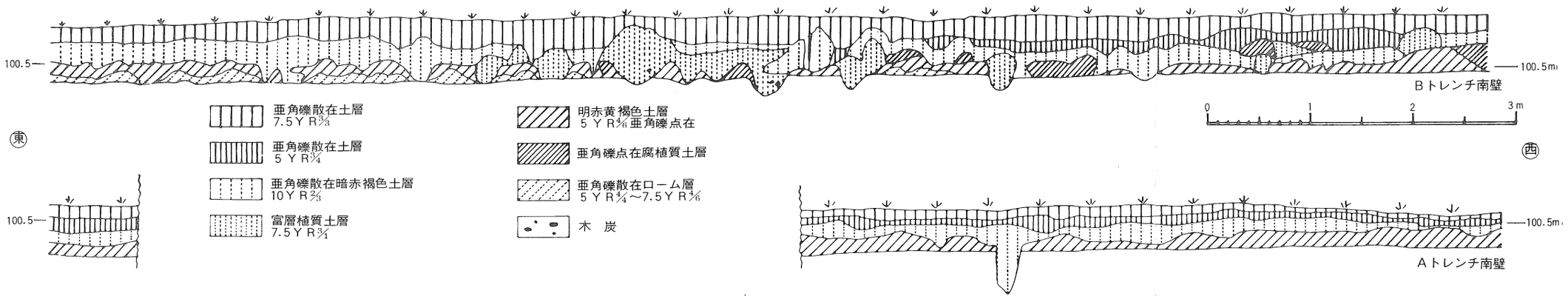
挿図－６　円墳主体部南北地層断面図



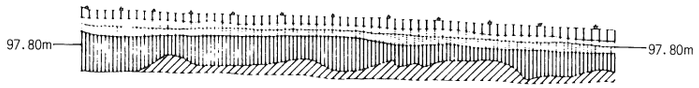
挿図－7　牧野遺跡トレンチ分布図



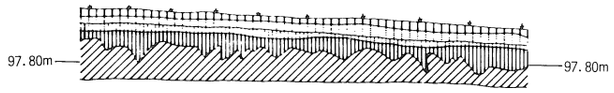
挿図－8　A・Bトレンチ柱穴状遺構分布図



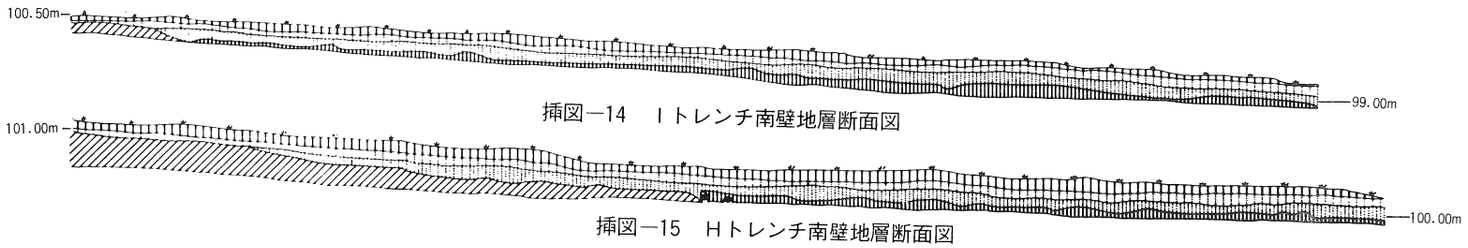
挿図－9　A・Bトレンチ地層断面図



挿図—10　C₁ トレンチ南壁地層断面図

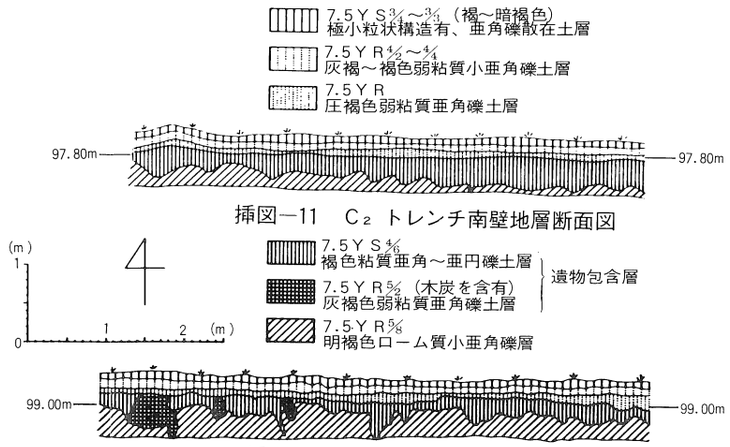


挿図—12　D₁ トレンチ南壁地層断面図



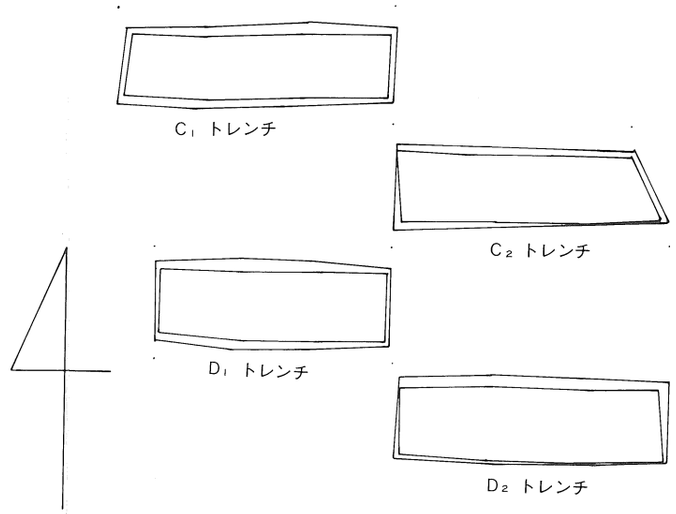
挿図—14　Ｉトレンチ南壁地層断面図

挿図—15　Ｈトレンチ南壁地層断面図

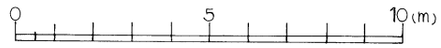


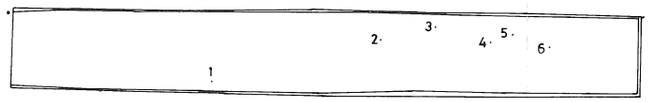
挿図—11　C₂ トレンチ南壁地層断面図

挿図—13　D₂ トレンチ南壁地層断面図



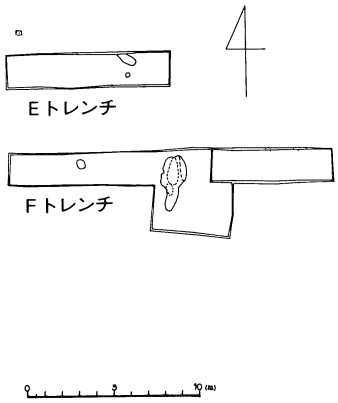
挿図—16　C・D・I・Hトレンチ分布図



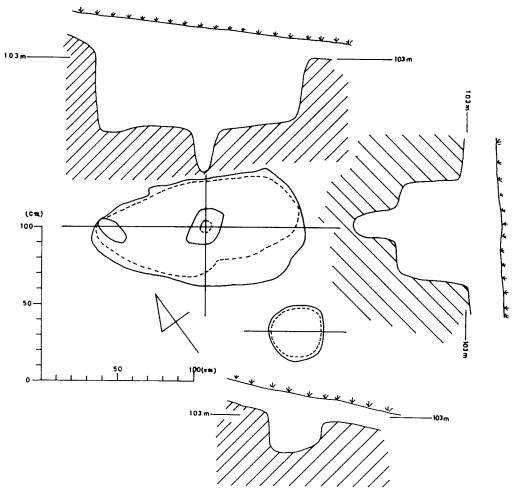


Ｉトレンチ

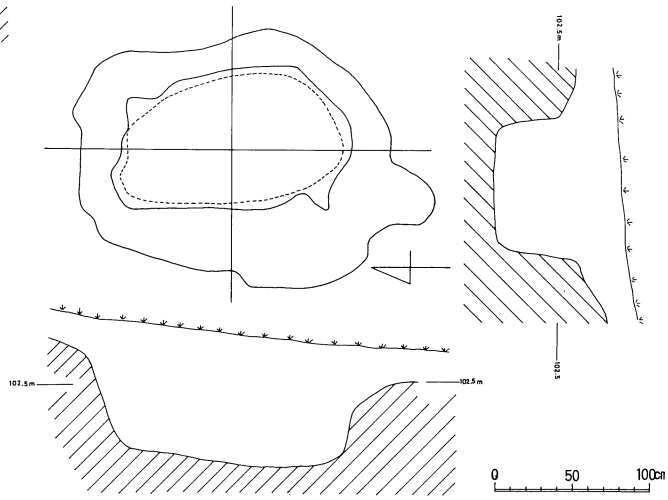
Ｈトレンチ



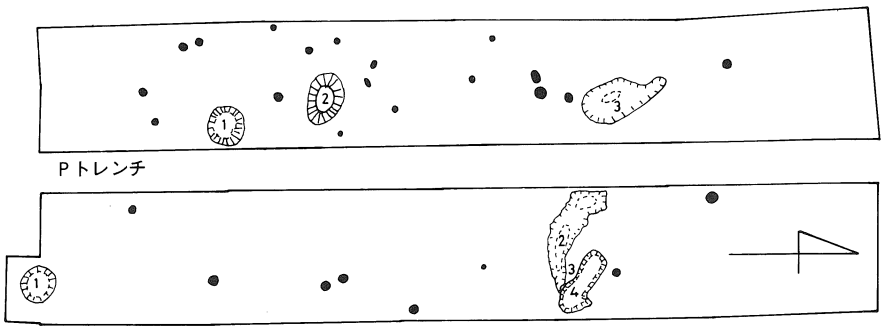
挿図—17　E・F・Gトレンチ平板実測図



挿図—18　Eトレンチ土壙状遺構

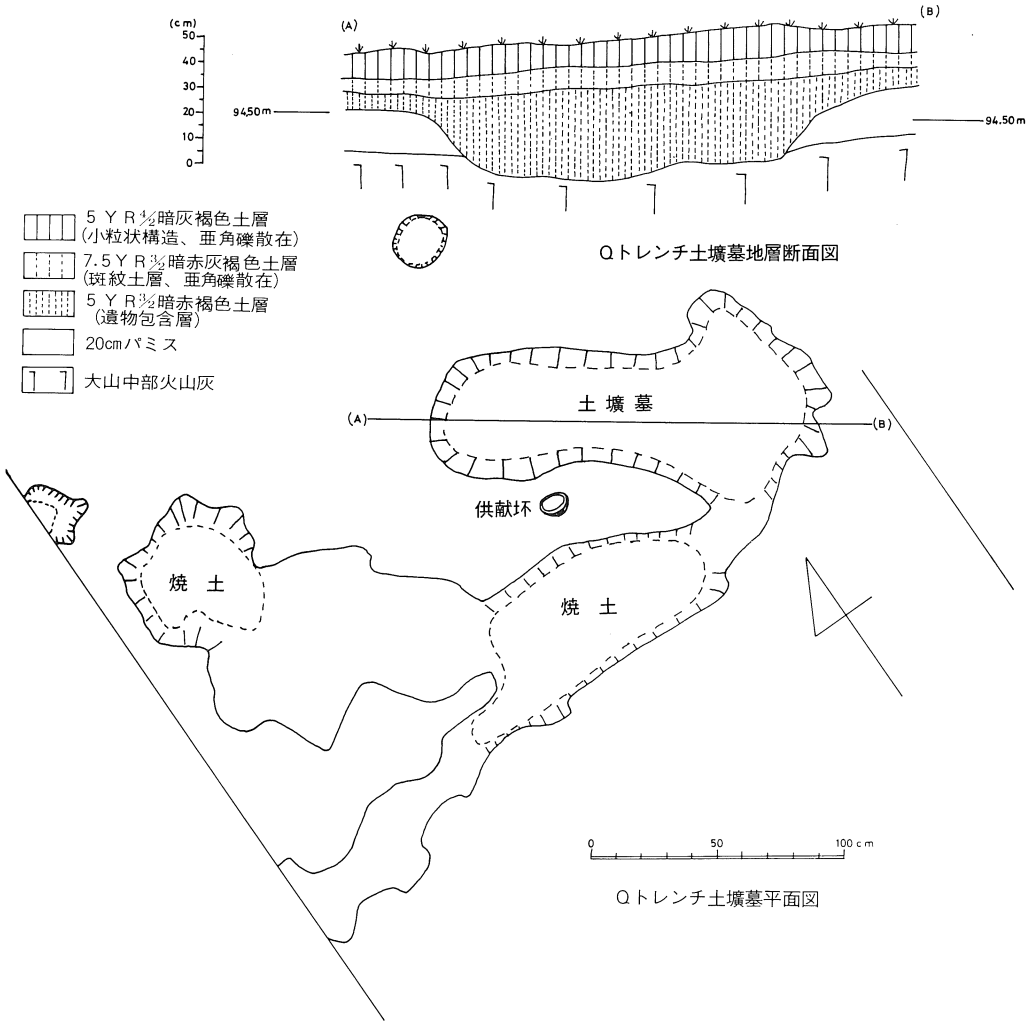


挿図—19　Fトレンチ土壙墓実測図

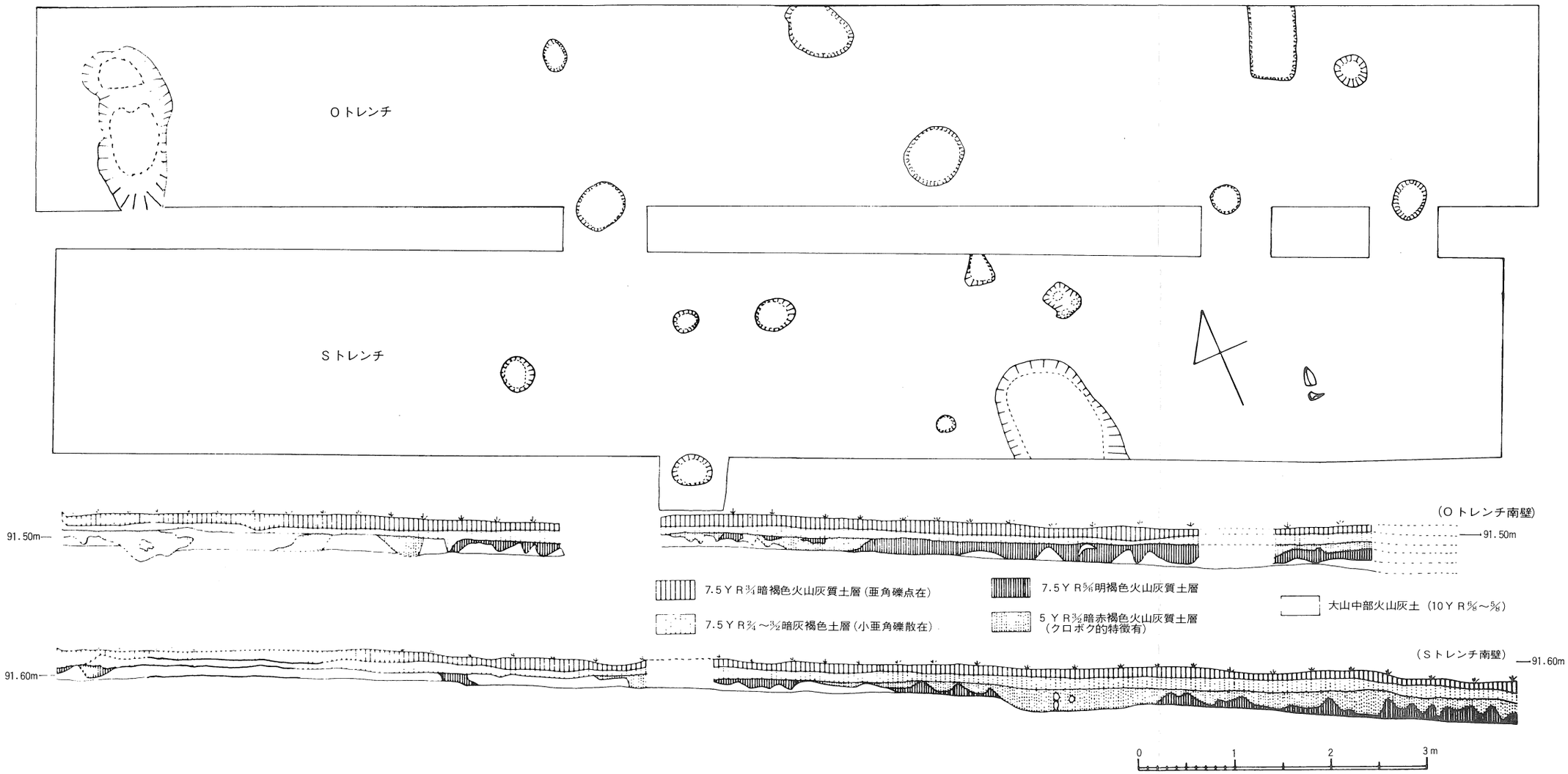


注－1　Pトレンチの(1)・(2)はピット状遺構(3)は焼土
注－2　Qトレンチの(1)はピット状遺構、(2)は焼土、(3)より坏が出土、(4)は土壙墓
注－3　黒丸は富腐植穴

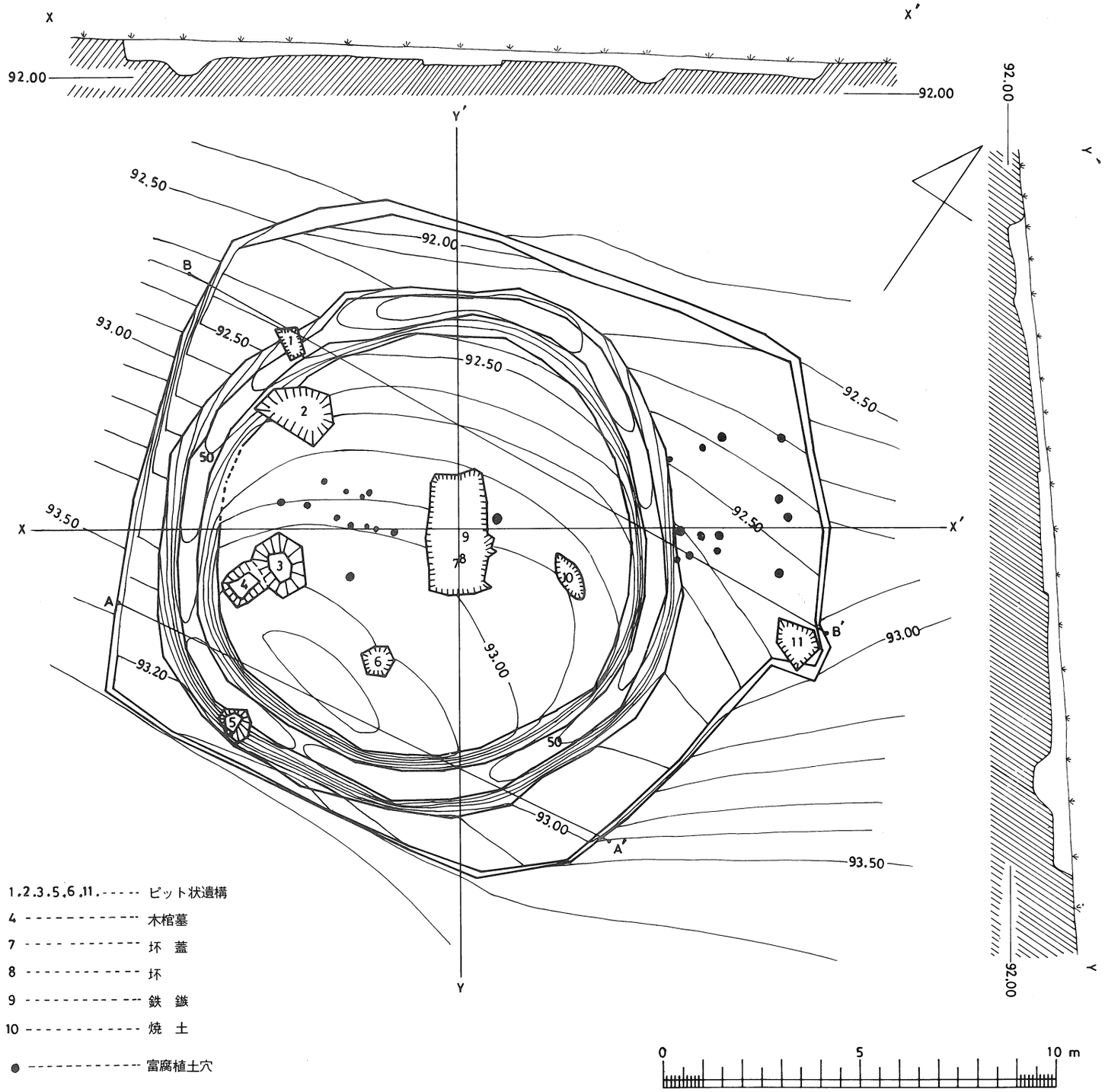
挿図－20　P・Qトレンチ平板実測図



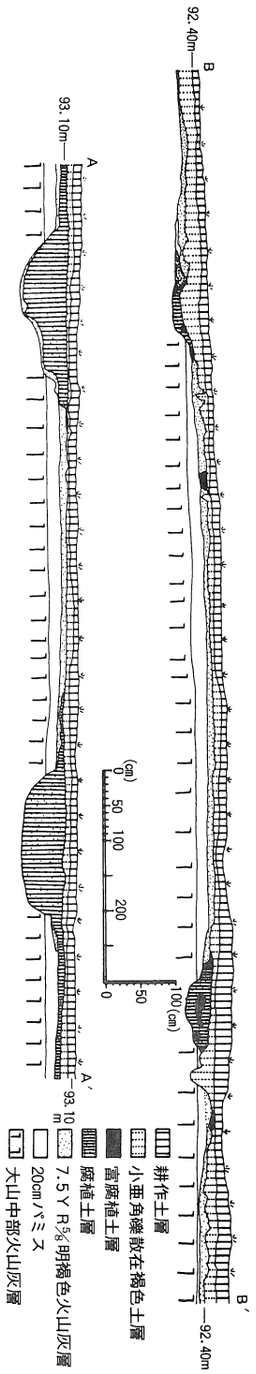
挿図－21　Qトレンチ土壙墓実測図



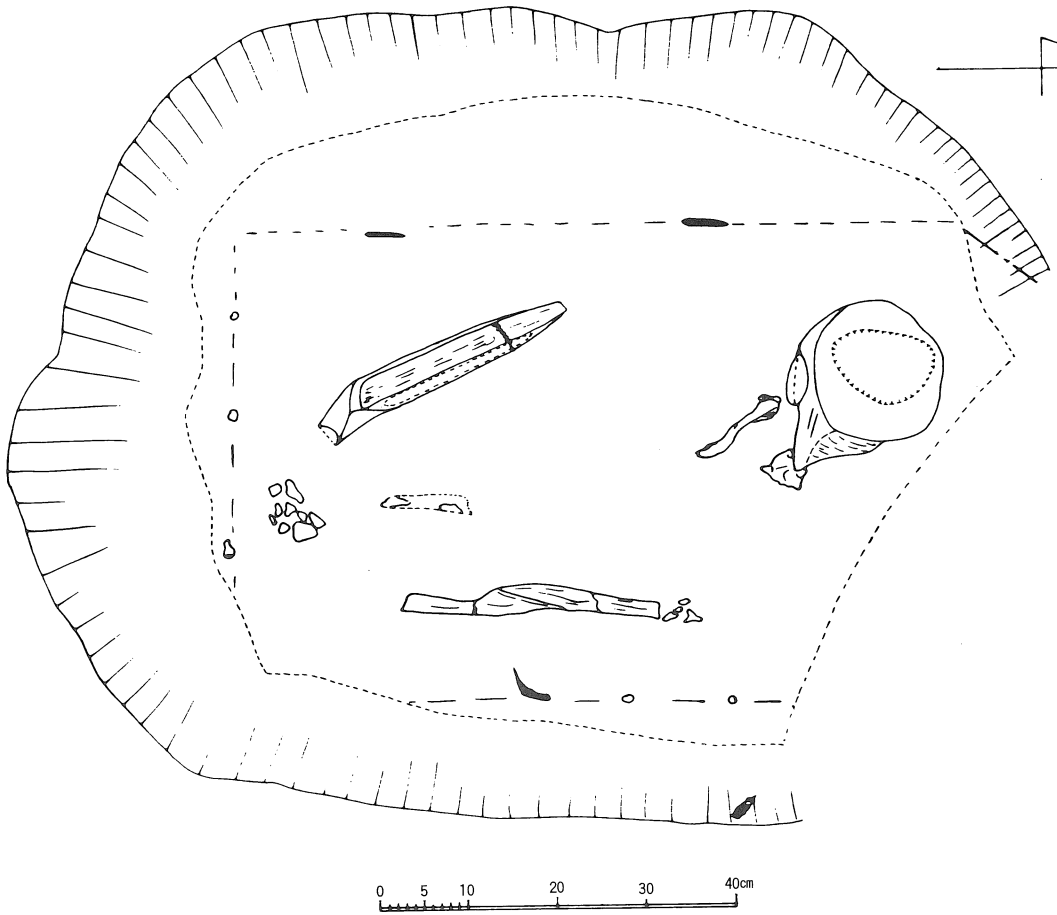
挿図―22　O・Sトレンチ平面実測及び地層断面図



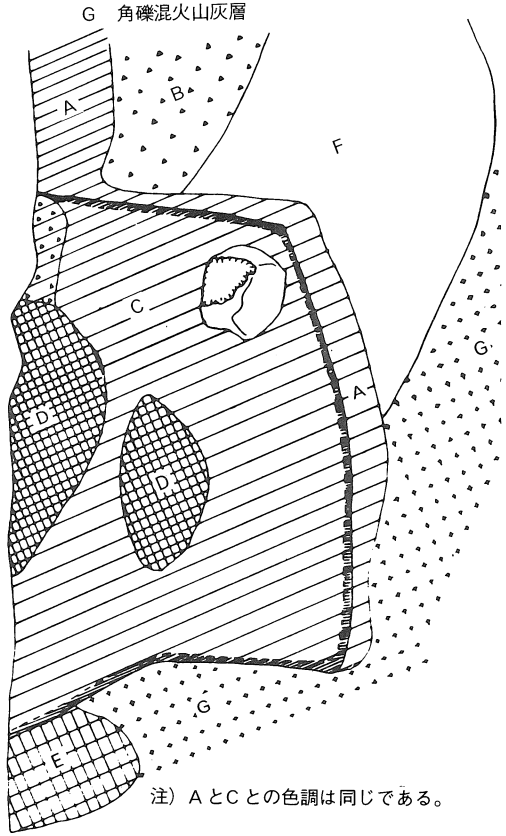
挿図－23　牧野古墳平板実測図



挿図－24　牧野古墳東西地層断面図



A　腐植土層
B　20cmパミス
C　木棺内部
D　富腐植土層
E　弱腐植土層
F　大山中部火山灰層
G　角礫混火山灰層



注）AとCとの色調は同じである。

木棺北側壁土層断面図

挿図－25　人骨出土状況実測及び土層断面図

〈遺物一覧表〉

（土器類）

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量cm	形態上の特徴	手法上の特徴	備考（出土地点）
1	甕	にぶい橙	緻密 小礫点在	やや硬質	口縁部外直径28.6	「く」の字に外反する口頸。 肩が少し張る。	口縁部内外面ヨコナデ。 外面上半叩き目。 内面上半ヨコ・クシメ調整。。	Aトレンチ内東部中央 —30cm No.1
2	壺又甕	にぶい橙	緻密 粗砂点在	やや硬質	口縁部外直径16.4	複合口縁で「く」の字に外反する口頸部。	口縁部内外面ヨコナデ。 肩部外面ヨコナデ。 肩部内面ヘラケズリ。	Aトレンチ内 No.2—1
3	壺又甕	浅黄橙	緻密 小礫点在 粗砂点在	やや硬質	口縁部外直径10.0	「く」の字に外反する口頸部。	口頸部外面ヨコナデ。 口頸部内面不明なれどタテナデ？	A—Bトレンチ間 No.18—3
4	甕又鍋	橙	緻密 小礫散在 粗砂散在	やや硬質	口縁部外直径40.0	内弯ぎみ「く」の字の口縁と直立ぎみの頸部。 口縁上端が凹面をなす。	口縁端部を外方へ少しつまみ出し、口縁上端と外端に凹面を出す。 内外面ともヨコナデ。	Aトレンチ内東部 —30cm No.14—2
5	平底型土器	橙～にぶい橙	緻密 粗砂点在	やや硬質	底部外直径9.2	ゆるやかに立ち上がる。	外面下半部タテナデ。 内面下半部タテナデ。	Aトレンチ内東部 —30cm No.14—1
6	平底型土器	にぶい橙	緻密 粗砂散在	やや硬質	底部外直径6.0	一端立ち上がって広がる。	外面下半部ヨコナデ。 内面下半部タテナデ。	Aトレンチ 表面にスス沈着 No.4—2
7	土鍋	灰白～黒褐	緻密 粗砂散在	やや硬質	口縁部外直径27.6	内弯ぎみ「く」の字の口縁と「く」の字の頸部により段をつくる。	内外面ともヨコナデ。	Bトレンチ 外面にスス沈着 （川砂を使用したと思わらる） No.5—1
8	土鍋	にぶい黄褐	緻密 粗砂散在	やや硬質	口縁部外直径27.6	口縁部を内弯させ段をつくる。	内外面ともヨコナデ。	Bトレンチ 7番の一部とも考えられるが、口縁部に若干の差を認める。 No.5—1—2
9	土鍋	灰白	緻密 粗砂散在	やや硬質	口縁部外直径30.6	口縁部を内弯、頸部を「く」の字にさせ口頸部内面に段をつくる。	内外面ともヨコナデ。	Bトレンチ No.5—1—3
10	甑又羽羽釜	橙～明橙	緻密 粗破散在	硬質	口縁部外直径25.8	内弯する口頸部、そして肩部を外方へつまみ出し、外面に段をつくる。	内外面ともヨコナデ。	Bトレンチ内東部 —30cm
11	高坏	黄橙	緻密 粗砂点在	やや硬質	脚部外直径17.2	「八」の字に開く高坏脚部。 端面に3条の凹線文。	裾部（外面）ヘラタテナデ。 端部内外面ハケメ、ヨコナデ。	Bトレンチ内—36cm 東壁より500cm、南壁 南壁より110cm No.1
12	甕又釜	淡赤橙	緻密 粗砂散在	硬質	頸部外直径38.0	「く」の字に外反する口頸部。	内外面ともヨコナデ。	Bトレンチ 土鍋かも知れぬが煮沸のあとが見られぬ。 No.3—1
13	壺	明黄褐	緻密 粗砂点在	硬質	口縁端部外外直径15.2	直立する頸部に外反する口縁、 口縁端部を上方へつまみ出す。	口縁端部に2条の凹線文。 内外面ともヨコナデ。	Bトレンチ中央部 —35cm

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量cm	形態上の特徴	手法上の特徴	備考（出土地点）
14	壺	にぶい橙	緻密 粗砂点在	硬質	口縁部外直径 14.8	「く」の字に外反する口頸部口縁端部肥厚	口縁端部に1又は2条の沈線。 口頸部内外面ともヨコナデ。 肩部内面に右斜クシメ。	A・Bトレンチ付近表採 444—1番地
15	壺又 高坏	にぶい橙	緻密 粗砂点在	硬質	口縁部外直径 12.8	直立ぎみに外反する口縁部。 口縁、下端を外方へつまみ出す。	口縁部に5又は6条の沈線。 内外面ともヨコナデ。	Bトレンチ内東部 —30cm
16	平底型 土器	にぶい橙 ～橙	緻密	やや硬質	底部外直径 5.8	一端立ち上がって広がる。 底面が上方へ屈曲する。	外面下半部ヨコナデ。 内面不明（底面の厚さが薄い）	Bトレンチ 雲母散在、他に石英粒角閃石点在。 No.12—1
17	平底型 土器	明橙	緻密 小礫点在	やや硬質	底部外直径 11.0	ゆるやかに立ち上がる。	内外面ともヨコナデ。	Bトレンチ中央部 —30cm
18	壺	灰黄	緻密 中砂点在	硬質	脚外直径 14.3	脚と底との間に幅13mmの凹面がある。	内外面ともヨコナデ。	C_1トレンチ中央部
19	壺又甕	にぶい 黄褐	緻密 粗砂点在	やや硬質	口縁部外直径 25.0	「く」の字に外反する口頸部 口縁端部肥厚。	口縁外面クシメを散らす、後ヨコナデ。 頸部内面ヨコクシメ。	C_2トレンチ東部 —65cm
20	壺	淡青灰	緻密 粗砂点在	硬質	頸部外直径 15.7	直立ぎみに外反する口頸部と大きく張る肩部。	外面肩部に縦、胴部に斜の格子叩目文後にヨコハケメ仕上げ。	Fトレンチ —15cm （土壙墓と相関？） 西壁より930cm、北壁より100cm
21	壺又 高坏	橙	緻密 小礫点在	硬質	端部外直径 12.3	不明	外面淡丹彩の後ヘラミガキ。 内面ヘラケズリ	Fトレンチ —15cm （土壙墓出土）（A） （壺の口縁か、高坏の脚部）
22	壺又 高坏	にぶい 黄橙	緻密 小礫散在	やや軟質	口縁部外直径 15.7	不明	内外面ハケメ、ヨコナデ。	Fトレンチ土壙墓（肩の張る壺と考えた） 口上端を約45°内傾させて見るが適当。
23	平底型 土器	にぶい橙 ～橙	緻密 粗砂点在	やや硬質	底外直径 8.3	直立ぎみに外反し、広がる、うする底厚。	外面、丹彩。タテ、ヘラミガキ。 内面、タテヘラケズリ。	Fトレンチ土壙墓 —35cm 底、外面下半にスス沈着。
24	平底型 土器	橙～ 浅黄橙	緻密 小礫点在	やや軟質	底外直径 6.1	外反ぎみに、ゆるやかに立上がる。	外面、タテヘラミガキ。 内面、ヘラケズリ、後ハケメ。	Fトレンチ土壙墓 —15cm
25	平底型 土器	にぶい 赤褐	石英粒 点在	やや硬質	底外直径 4.9	一端立上がって広がる。	外面、丹彩、ヨコナデハケメ	Fトレンチ土壙墓(E)
26	高坏型 土器	橙	緻密 粗砂点在	やや硬質	口縁部外直径 32.6	4個の円形浮文と3本の縦長粘土紐の貼付。 口上端が平面となっている。	内弯する坏部上半に5条の凹線をめぐらし、ハケメ仕上げ。 外面坏部下半に丹彩ヘラミガキ。	Hトレンチ内西部 No.5—1
27	高坏型 土器	明黄橙	粗砂散在	やや軟質	不明	口上端が平面となっている。 坏部上半に4本の縦長粘土紐貼付が認められる。	外面、坏部上半に5条の凹線。粘土紐を貼付後ハケメ仕上げ。 内面、ハケメ、ヨコナデ。	Hトレンチ No.11—1

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量cm	形態上の特徴	手法上の特徴	備考（出土地点）
28	壺又甕	明黄橙	小礫散在	やや軟質	口縁部外直径15.7	弧状に外反する口頸部強く張る肩	口縁部ヨコナデ、ハケメ。肩・胴部はクシメ文、ハケメ仕上げ。	Hトレンチ中央部 —45cm 外面にスス沈着
29	平底型土器	にぶい赤褐	緻密粗砂散在	やや硬質	底外直径6.1	外反ぎみにゆるやかに立上がる。うすい底厚。	丹彩、ヨコ、ハケメの外面。内面、ヨコナデ。	Hトレンチ中央部 —50cm （A）
30	平底型土器	黄橙	粗砂散在	やや硬質	底外直径10.6	約60°の角度で立上がる。	外底面、ヘラケズリ。内底面ヨコハケメ。	Hトレンチ中央部(B) —50cm 内面の調整が悪い。
31	壺	青灰	緻密	硬質	脚外直径13.0	丸味のある脚を有する。やや内弯ぎみに立上がる胴	外面胴下半ヘラケズリ。脚部ハケメ仕上げ。内面ハケメ、ヨコナデ。	Hトレンチ中央部 —30cm （胴部下端に1条のヘラガキ沈線）（C）
32	壺	青灰	緻密	硬質	脚外直径10.2	角ばった外反ぎみの貼付けた脚	外底面ヘラヨコナデ、ハケメ。内面ヨコナデ、ハケメ。	Hトレンチ —45cm 東壁より710cm、南壁より810cm（D）
33	高坏型土器	にぶい褐	緻密	やや硬質	口縁部外直径16.4	肥厚した口縁端部。ゆるやかな凹面の口上端面。	口上端、内面ヘラミガキ、ヨコナデ。外面坏部上半クシメ後ヨコナデ。	Iトレンチ No.1—10
34	坏	青灰	緻密小礫点在	硬質	口縁外直径15.7	内弯ぎみに直立する口縁端部。外面底に径約7cm、幅3mmの回転台の跡	内外面ともハケメ、ヨコナデ。幅1cm前後の粘土紐5～6段積みあげ（巻きあげ？右回り）	Qトレンチ土壙墓 東壁より1.05m、南壁より12.91m
35	坏又壺	橙	緻密	硬質	口縁部外直径15.4	口縁端部肥厚、口縁部を外方へつまみ出し、内側に段をつくる。	内外面ともヨコナデ、ハケメ口縁下方にクシメ文。後丹彩	Pトレンチ内北部
36	壺	橙	緻密粗砂散在	やや硬質	不明	肥厚した口上端	内外面ヨコナデ	P・Qトレンチ南方表採。
37	壺	にぶい黄橙橙	緻密	やや硬質	口縁下端外径13.6	外反ぎみの口縁部（複合）	口縁部に5条のヘラガキ沈線。内外面ともヨコナデ、ハケメ。	P・Qトレンチ南方表採。
38	坏蓋	黄橙	緻密粗砂点在	軟質	口縁部口径13.1	やや外反する口縁部と胴部に3～4段の凹面。	外面は粗いヨコナデ。内面は密なヨコナデ、ハケメ5～6段粘土紐積みあげ（右回し巻きあげ？）	円墳主体部
39	坏	黄橙	緻密粗砂点在	軟質	口縁部直径15.0	全体を外反させながら口上端を少し肥厚させる。（口上端をつまみ上げる）	円外面とも粗いヨコナデ。5～6段の右回し粘土紐巻きあげ。	円墳主体部
40	壺	にぶい橙	緻密小礫点在	やや硬質	口縁部外直径19.0	「く」の字に外反する口頸部と直立ぎみに外反する複合口縁部	口縁部上半にクシメ、下半部はつまみ出しハケメ、ヨコナデ。内面はヨコナデ。	Rトレンチ東部（円墳周溝内）
41	壺	にぶい橙～にぶい橙	緻密粗砂点在	やや硬質	口縁部外直径18.8	「く」の字に外反する口頸部と直立ぎみ口縁部に2条のゆるい凹面	口縁部内外面ともヨコナデ。頸部内面ヘラケズリ。	Tトレンチ東部—55cm（円墳周溝内）
42	壺	明橙	緻密粗砂散在	やや軟質	口縁部外直径17.0	「く」の字に外反する口頸部と内面口縁部に凸面のない直立ぎみ外反の複合口縁。	口縁部に10条（？）のヨコ、クシガキ沈線。内外面ともヨコナデ。	Tトレンチ中央部 —30cm（円墳周溝内）

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量cm	形態上の特徴	手法上の特徴	備考（出土地点所
43	高坏型土器	明赤橙	緻密 粗砂点在	やや硬質	口縁部直径 26.7	坏部上半に5条の凹面そして口上端の肥厚した平面。	外面、ヨコナデの後丹彩ヘラミガキ 内面坏部上半ヨコナデ	円墳墳表採 （脚付の鉢とも思える）
44	高坏	青灰	緻密	硬質	脚部凸帯径 6.5	「八」の字に開く高坏脚部	脚部上半に一対のスカシと2条の凹。	Rトレンチ東部
45	壺や甕	明橙	粗砂散在	やや軟質	不不明	内弯する口縁部と肥厚口縁端部（口上端は平面）	口縁端部に凹凸面施し後、内外面ともヨコナデ。	OSトレンチ南東方 −30cm （地点Z）
46	坏・蓋	暗青灰	緻密	硬質	口縁部外直径 12.8	外面口縁部上半に弱い2条の凹面、口上端をつまみ上げ薄くする。	外面ヨコナデ。 内面ヘラケズリ、後ヨコナデ。	OSトレンチ南東方 −30cm （地点Z）
47	壺又甕	灰白〜淡黄	粗砂散在（石英粒多い）	やや軟質	口縁部外直径 19.4	弧状に外反する口頸部を同等の厚さにする。	内外面とも口縁部に右上りのナデ。 内面肩部をヘラケズリ。	地点1−A
48	提瓶又壺	青灰	緻密	硬質	口縁部外直径 7.8	直立ぎみの頸部と内弯ぎみの口縁上半に2条のヘラガキ沈線。	内外面ともヨコナデ。つまみ上げにより口上端を薄くする。	地点1−B
49	椀	灰〜黒褐	緻密	硬質	口縁端外直径 6.7	弱く外反させ薄くされた口縁端。	内外面ともヨコナデ	地点3−A
50	壺又甕	黄橙	緻密 粗砂点在	硬質	口縁部外直径 21.0	肥厚し、平面の口上端面。	外面縁部ヨコナデ。 内面口縁部ハケメ、ヨコナデ。	地点4−A
51	壺又瓶	灰黒〜オリーブ黒	小礫散在 緻密	硬質	脚外直直径 12.2	低い脚と浮いた底面	脚部側面、底面に凹面をつくり胴下半部内外面ともハケメ、ヨコナデ。	地点4−B
52	壺	灰白	緻密	硬質	口上端部外径 9.7	直立ぎみ外反の頸部。弧状内弯の胴部そして口上端に1条の凹面。	内外面ともハケメ、ヨコナデ底面に内直径約6cmの転台跡。	地点5

〔石器〕

53：安山岩類の石で表面を研磨した砲弾形、紡錘形の約½個体に見える。尖端は平滑をなし端部両側面に 1.5cm角の打撃痕らしきものを8個見る。（出土地点Aトレンチ№5）

54：砥石であり鋭利な数条の使用痕がある。研磨に用いた為全体として若干右回りにねじれている。（出土地点Aトレンチ№12）

55：玄武岩又輝緑岩系の剝片を使用した石刃と考える。刃部の片面に研磨加工を見る。（出土地点Hトレンチ東部−40cm）

56：安山岩系の自然石砥石とも見える。上面は研磨の為に凹面となっている。そして片方の側面にも平滑な面があり使用痕と思う。底面には上面の凹面の長軸に略直交するゆるい凸凹面を感じる。（出土地点Iトレンチ№5）

57：安山岩を使った模造石斧、刃渡り約 4.0cm（一部欠損）長さ5cm、厚さ 0.5cm、刃部を両面入念に研磨し、その他も粗気味に研磨している。（出土地点Iトレンチ6−1）

58：円墳主体部より出土した唯一の石であり、石室又は石棺の一部とは考え難い安山岩である。形態として、尖頭器型をしており、先端部の半分が欠損しているように見える。

〔牛歯〕

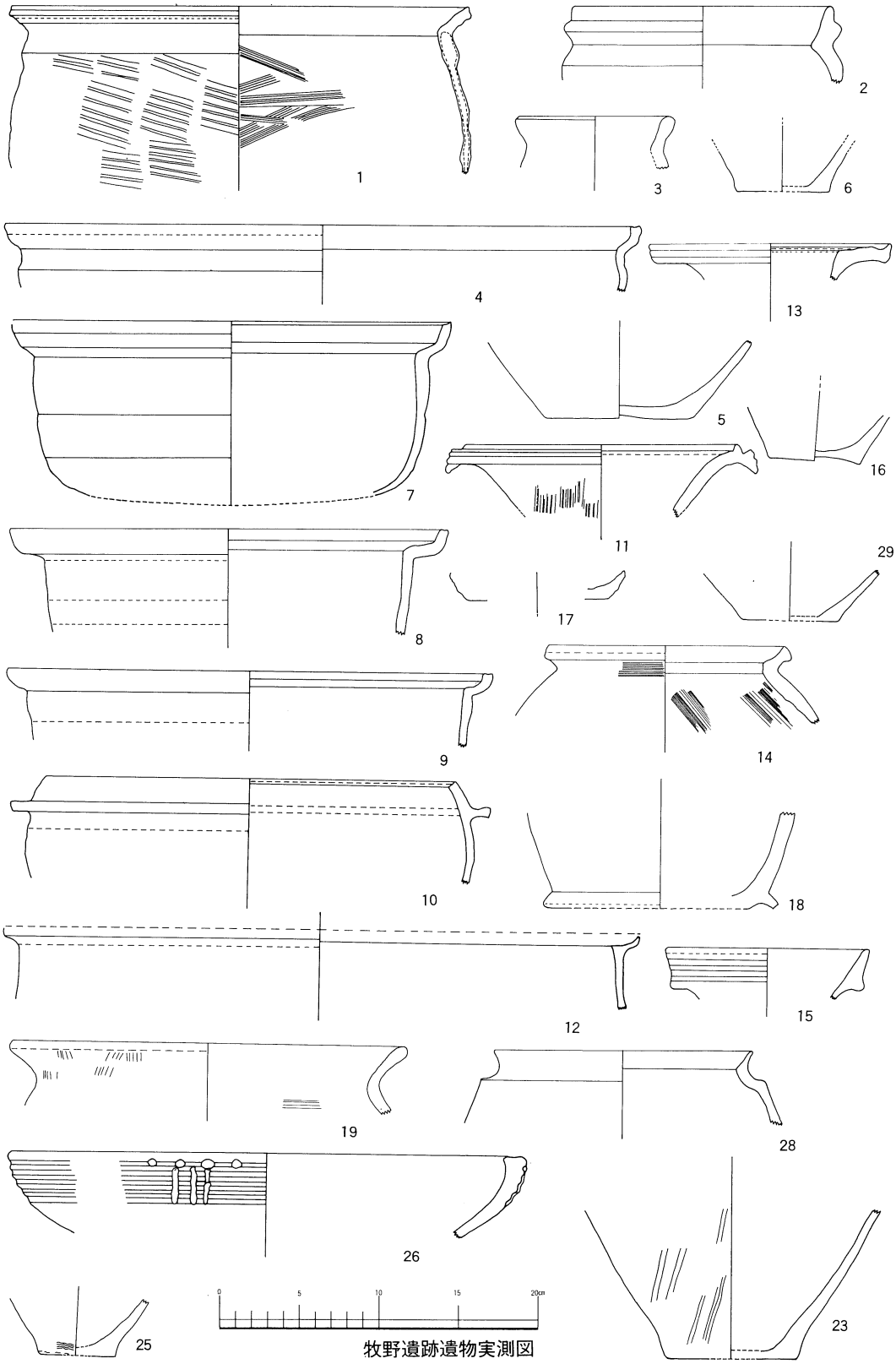
59：Aトレンチ西部。地表下−20〜30cmくらいで出土した歯であり、清未忠人（県博学芸員）、松下理一（鳥取赤十字病院歯科医）氏らによると現在より小型の成牛、上、第2後臼歯、右ではなかろうか。

〔鉄器〕

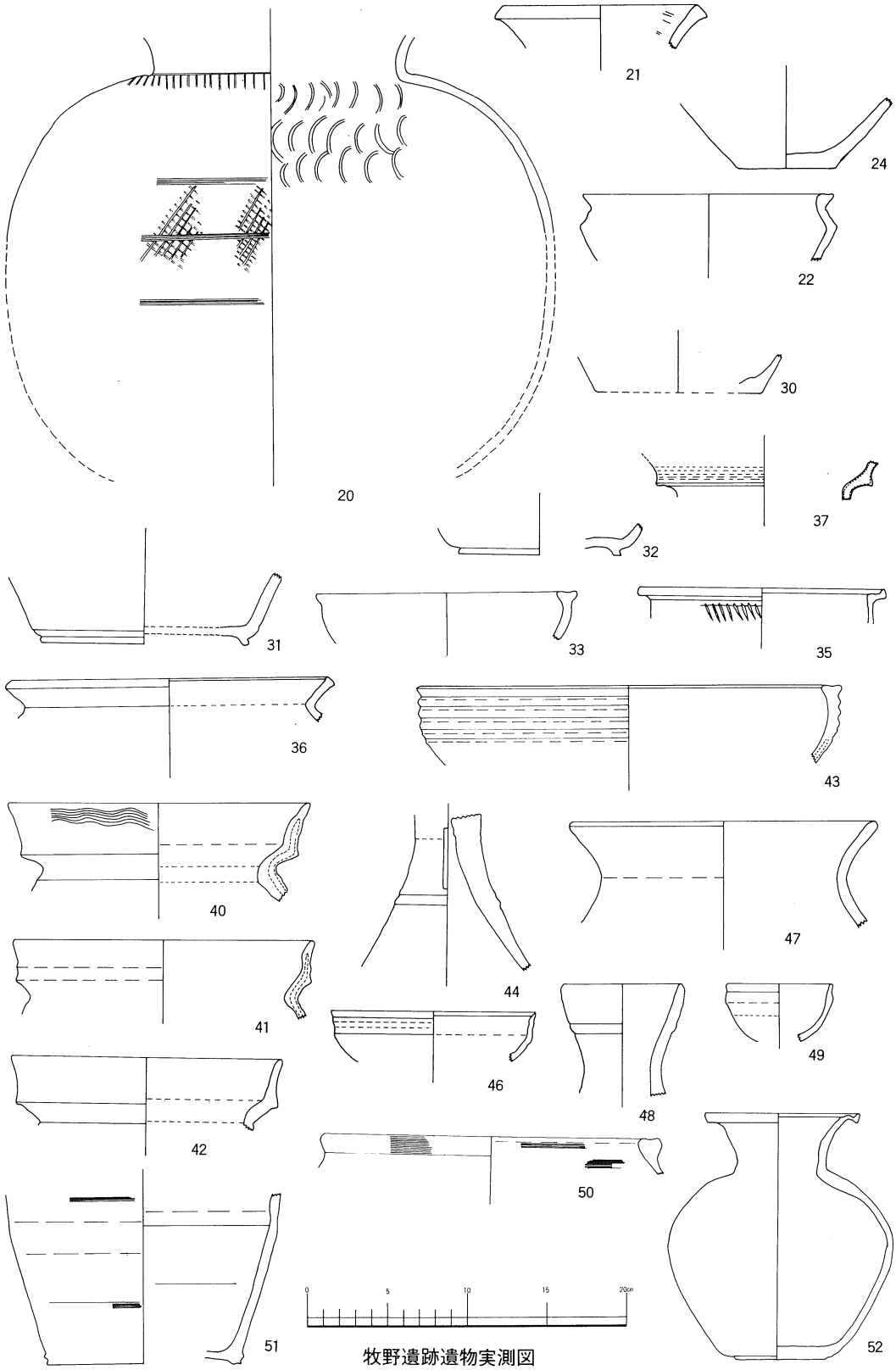
60：Qトレンチ南壁より出土の刀子。現存長11.7cm、身巾 2.2cm、厚さ 0.3cm。

61：円墳主体部出土の鉄鏃。現存長9cm（含茎 2.7cm）身巾 2.8cm、身厚 0.3cm、断面が扁平なダ円形をなし、有茎の二翼鏃（逆刺）

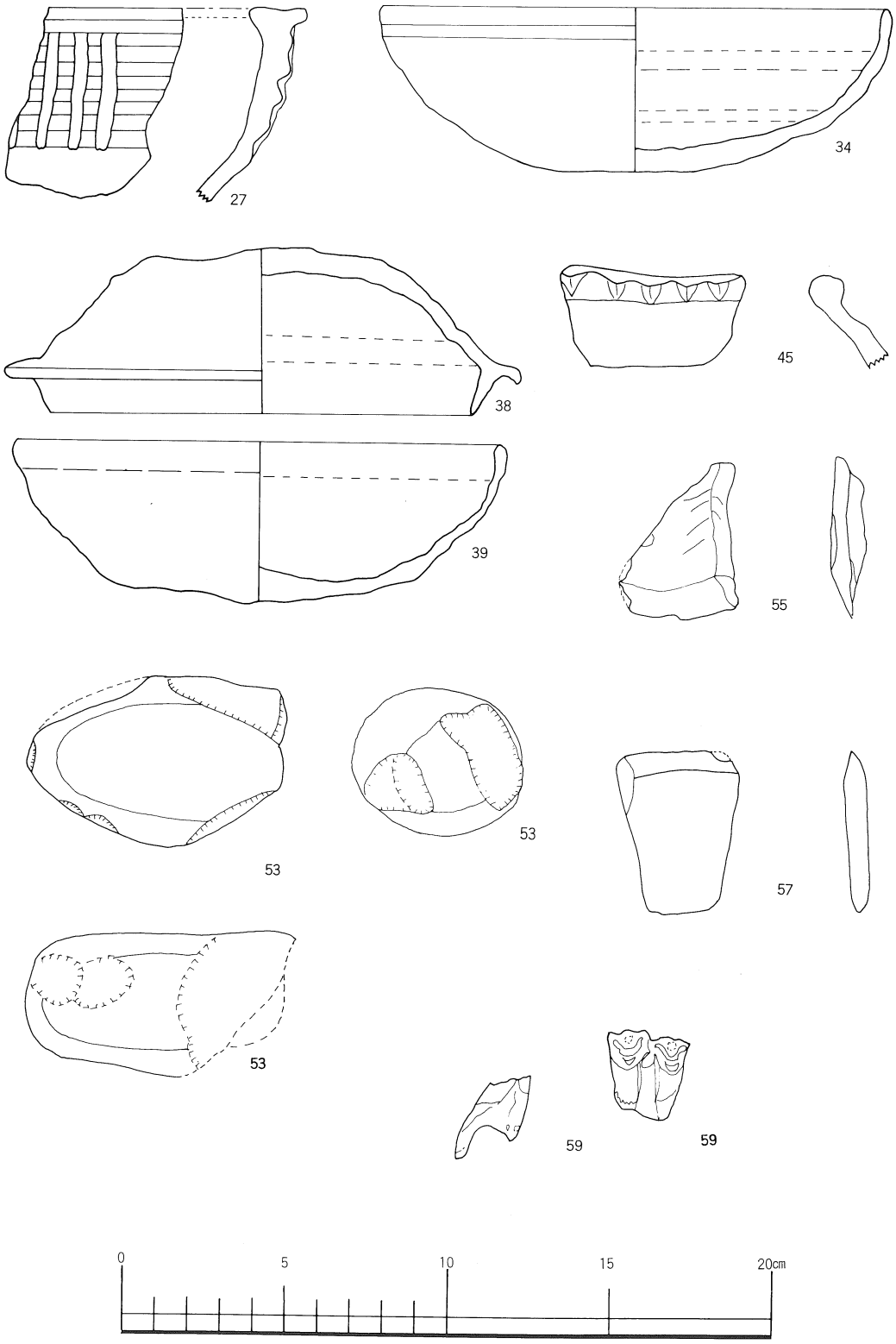
62：木棺墓出土の角釘。縦と横の差のあまり大きくない直方体の木棺と思われ、釘は上（5ケ）、中（7ケ）、下（10ケ）、最下（17ケ）、と四段に分かれて出土し、又、外方より2本出土した事から二重になっていたかも知れない。
最長釘の長さ 7.5cm、断面は長方形であるが、釘頭にダ円形（中段より出土）をしたものがあり船釘を思わせる。



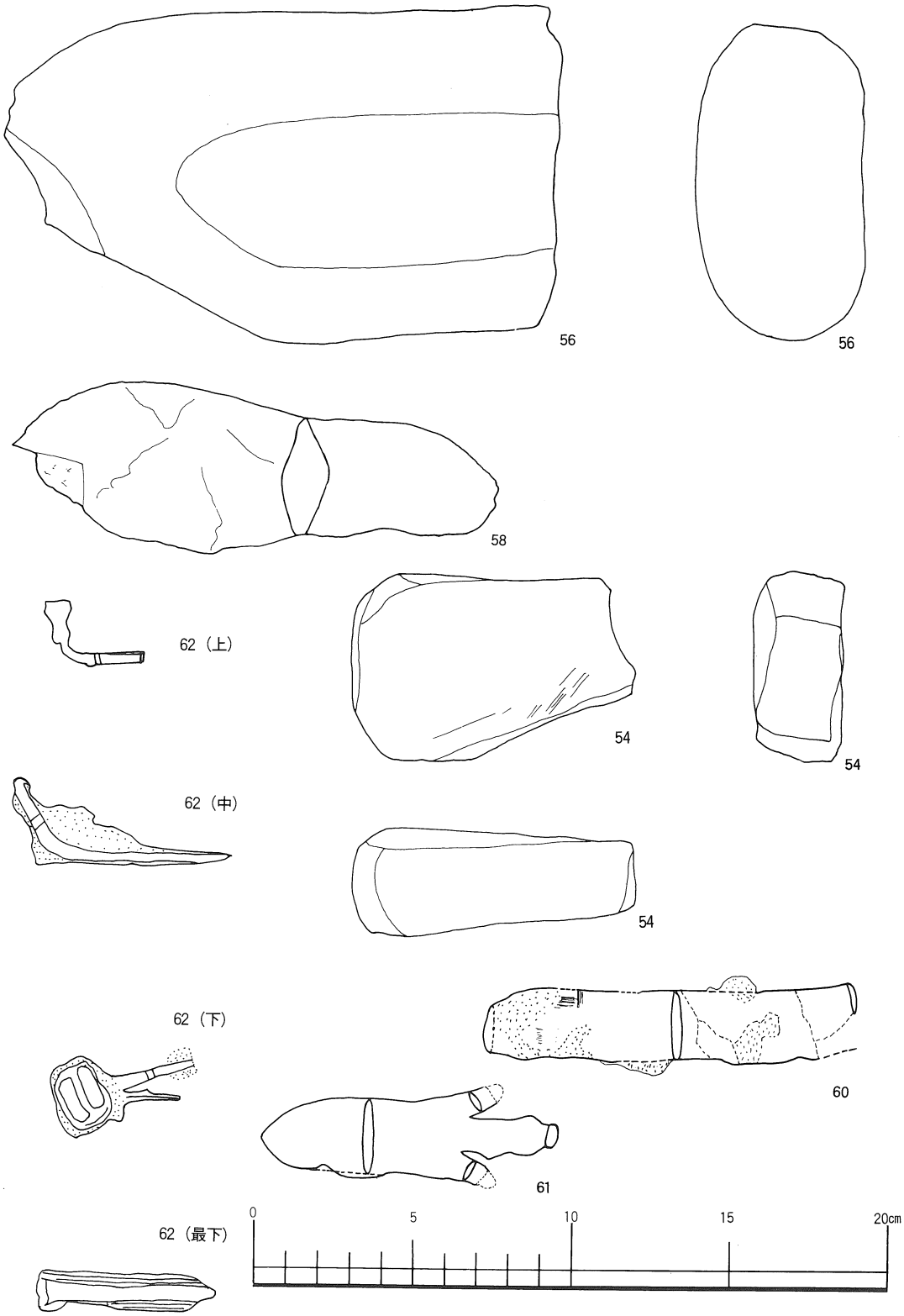
牧野遺跡遺物実測図


20
21
22
24
30
31
32
33
35
36
37
40
41
42
43
44
46
47
48
49
50
51
52
0
5
10
15
20cm

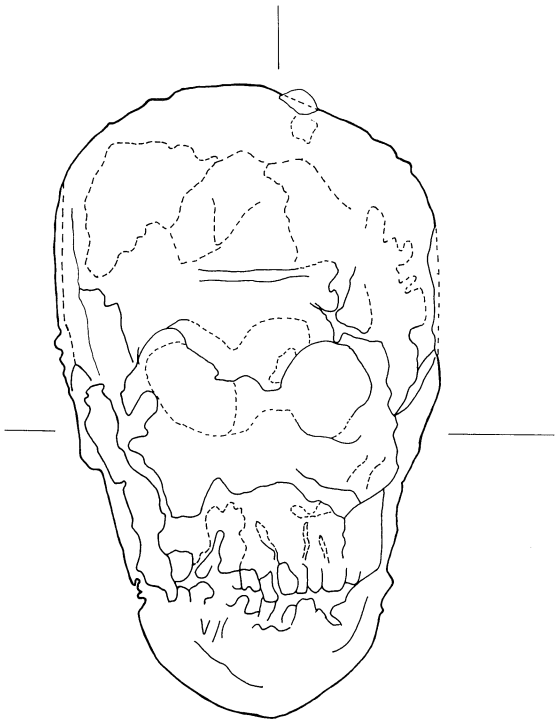
牧野遺跡遺物実測図



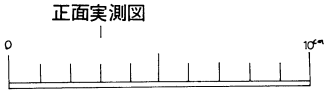
牧野遺跡遺物実測図

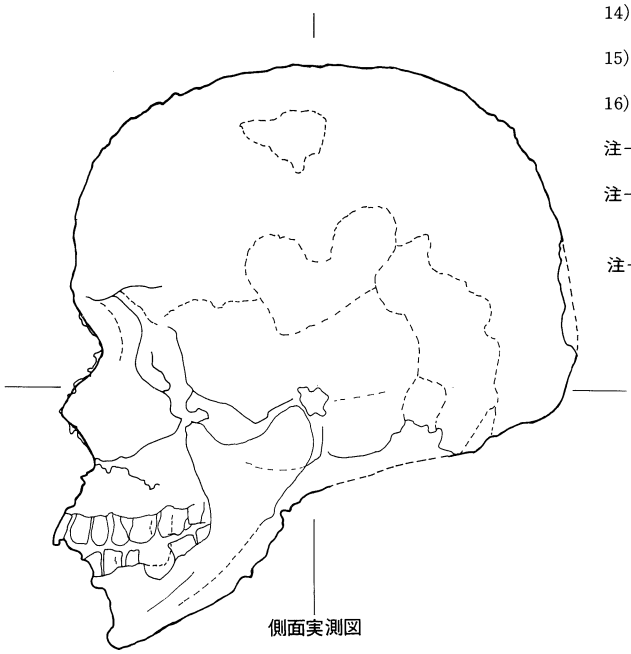


牧野遺跡遺物実測図

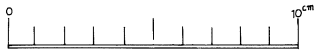


正面実測図





側面実測図



〈頭骨計測値〉

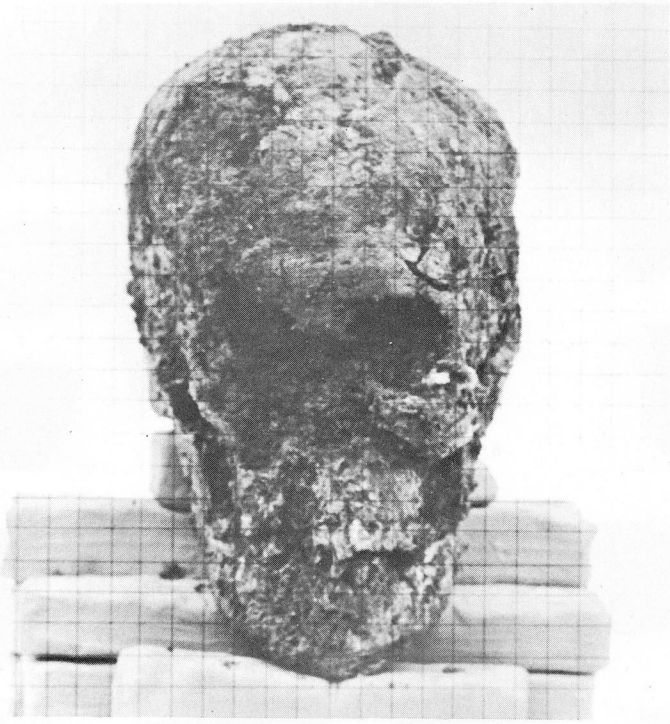
1）頬弓幅…… 9.78cm（？）
2）中顔幅…… 8.00cm（？）
3）上顔高…… 5.79cm
4）鼻　幅…… 2.63cm（？）
5）鼻　高…… 3.08cm
6）鼻根幅…… 1.50cm（？）
7）鼻根模弧長……不明
8）頭骨最大長……17.67cm
9）頭骨最大幅……12.78cm
10）頭骨水平周……53.5cm
11）全側面角……77.5°
12）歯槽側面角……60°（？）
　●突顎に属する
13）コルマン示数……59.23
　●高上顔型に属する
14）ウィルヒョウ示数……72.3
　●広上顔型に属する
15）鼻示数……85.36
　●広鼻に属すも不明確
16）頭長幅示数……72.34
　●長頭型に層する

注－1　約4m離れて接写した頭骨を、実物の1.33倍に拡大し、トレースを行なって計測した。

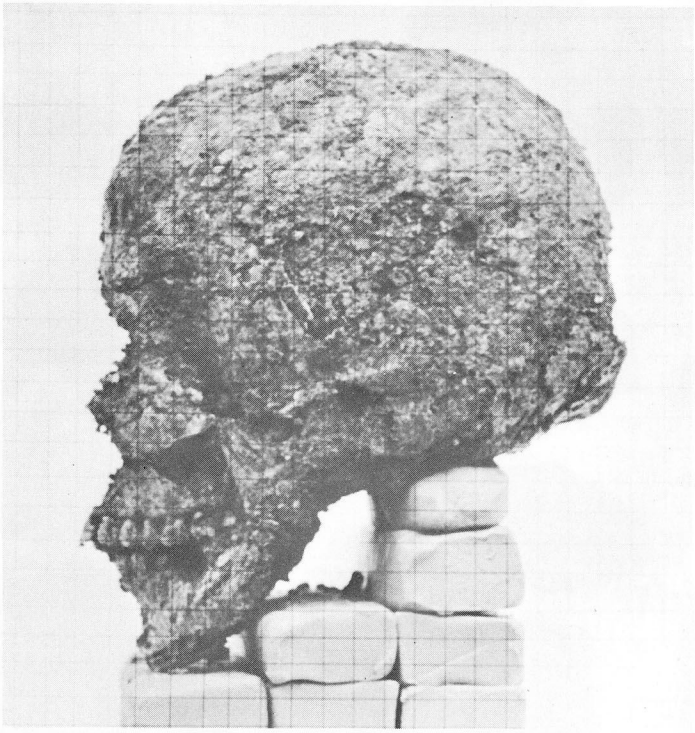
注－2　計測法は、鈴木尚（1963）：日本人の骨、岩波書店を参考とし、不明確な計測値には？マークを記した。

注－3　写真撮影時、ミシン糸50番を使用して1cmメッシュを作製した。
又、撮影方法について、松下理一（鳥取赤十字病院歯科医）氏の助言を得た。

挿図－26　木棺墓出土人頭骨

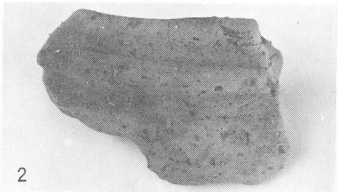


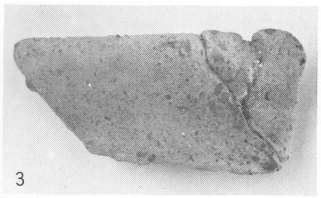
頭　骨　正　面（木棺墓出土）

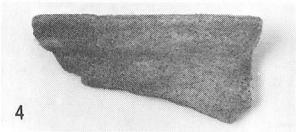


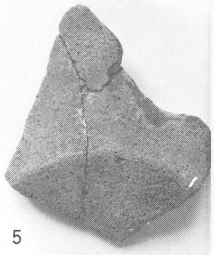
頭　骨　側　面（木棺墓出土）

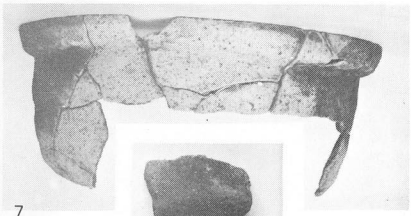
1


2

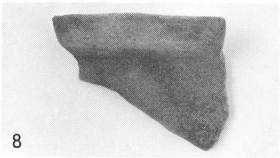

3

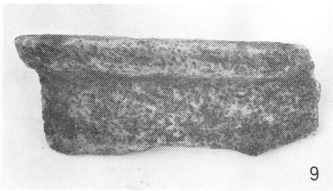

4

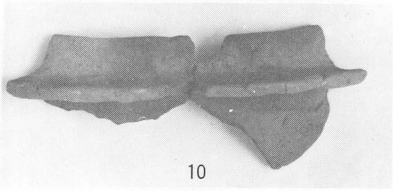

5

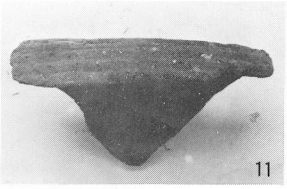

7

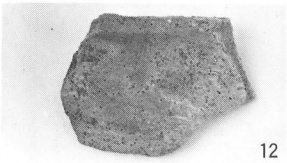
6

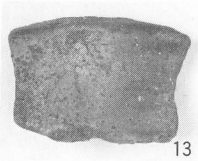

8

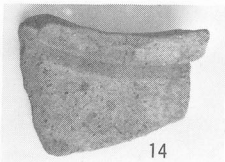

9

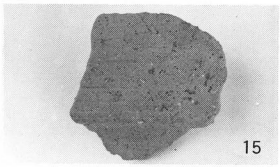

10

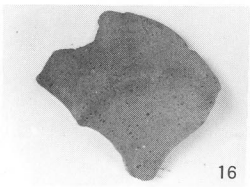

11

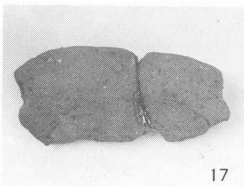

12


13

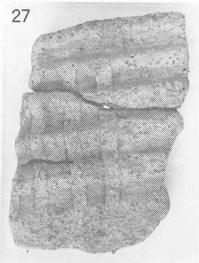

14

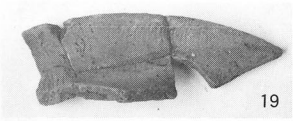

15


16

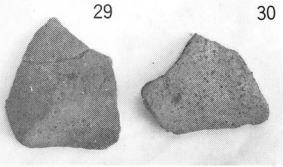

17

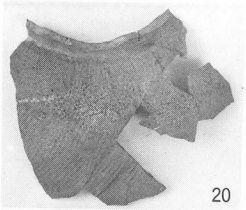
27

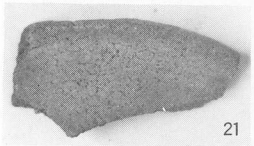



19

29 30

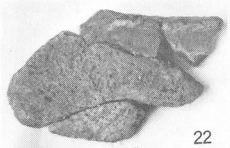


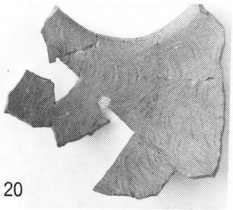

20

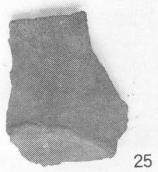

21

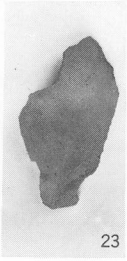
28

18

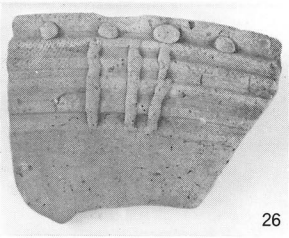

22


20

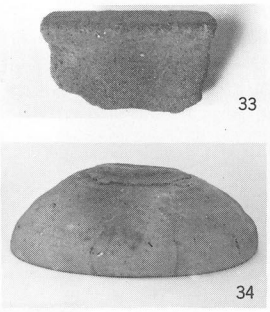

25

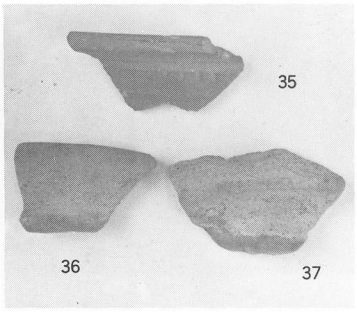

23

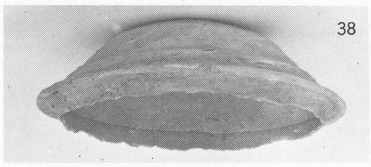
24


26

31
32


33
34

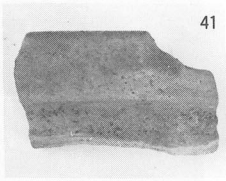

35
36
37

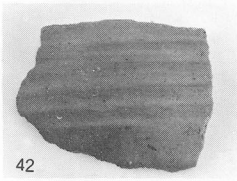

38

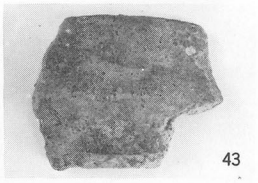
39

38
39

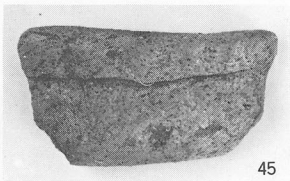
40

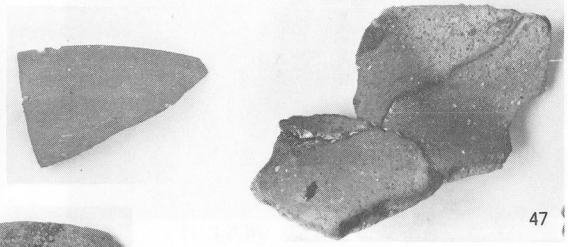

41

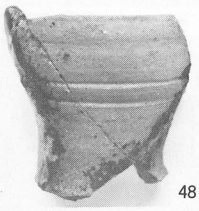

42

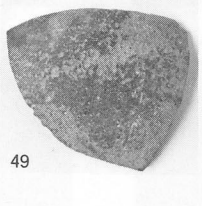

43

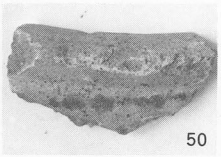
44

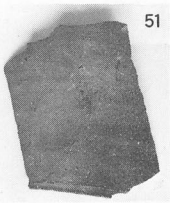

45

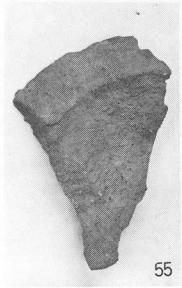

47

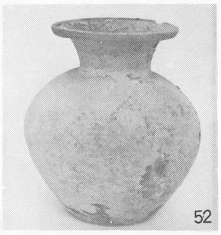

48

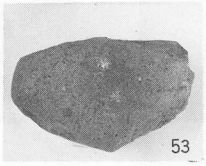

49

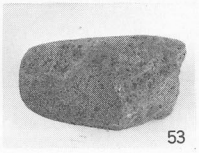

50

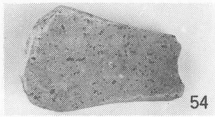

51

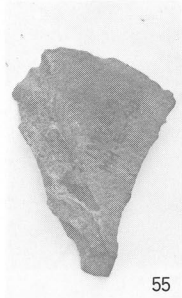

55

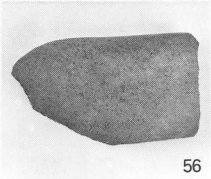

52

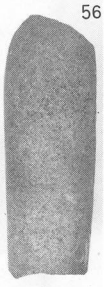

53

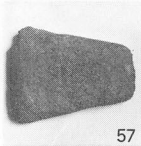

53


54


55

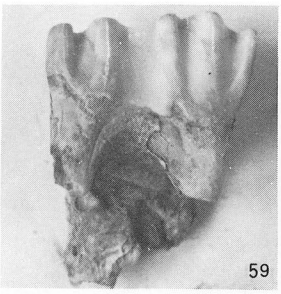

56

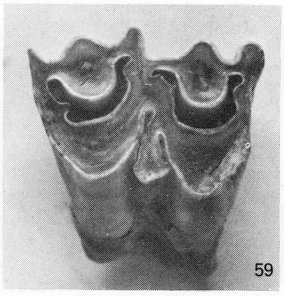

56

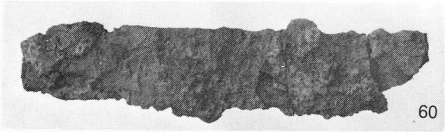

57

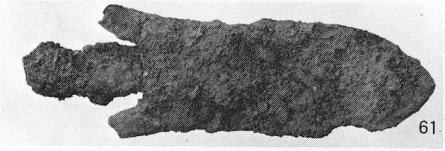
58

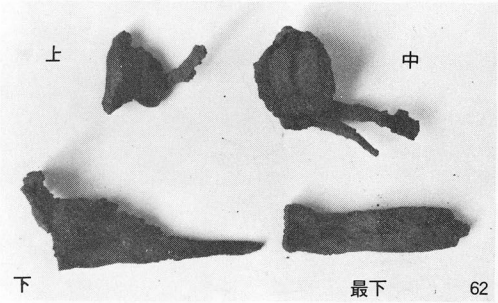
58





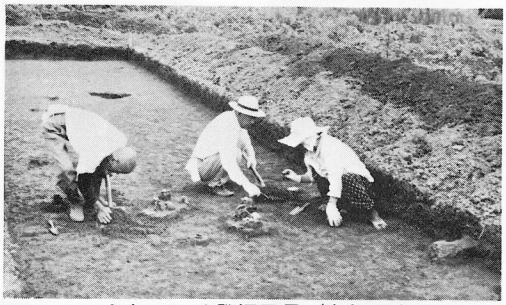






Ｉトレンチ杭打ち

Ａトレンチ東隅（南方より）


Ａトレンチ発掘風景（東方より）

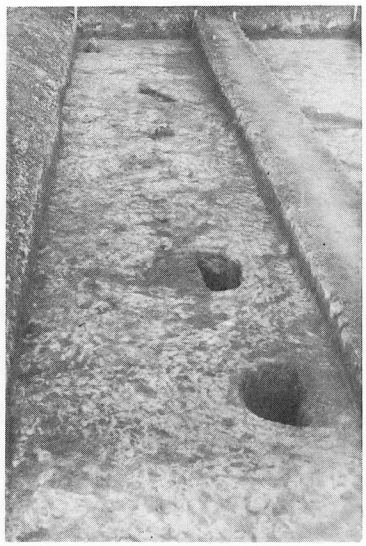
Ｂトレンチ土鍋出土状況（南方より）

Ｈトレンチ西隅巨石

Ｆトレンチ土壙墓直上（No.20の壺出土状況）

Ｆトレンチ土壙墓（西方より）

Qトレンチ供献坏出土（北方より）



Pトレンチ（南方より）

円墳主体部（北方より）

Tトレンチ発掘風景（東方より）

木棺墓人骨出土状況（南方より）

Tトレンチ（左）　（東方より）　Rトレンチ（右）

Sトレンチ（左）　Oトレンチ（右）（東方より）

あとがき

本調査で判明した事柄は、(1)牧野古墳（高塚）は７世紀初期の築造である。(2)木棺墓（屈葬）は円墳とは直接的な関係を認め難い。(3)Ｑトレンチ内出土壙墓（直葬）は供献土器が円墳主体部出土のものと同質の塑形作製である事から６世紀末～７世紀初期と判断。ここでは円墳上でも見られた焼土の解釈を今後の課題としている。つまり、円墳主体部出土の坏・蓋の焼成が悪い事と、隣りにある焼土とは因果関係があるや否や。(4)弥生後～末期と考えるＦトレンチ内土壙墓と、その直上に出土した７世紀初期と判断する須恵器壺との相関をどのように解釈するか。(5)Ａ・Ｂトレンチは中世の住居址である可能性を有する。(6)円墳上で見られる径20cm大の富腐植土穴が規則的配列をしているのは何を意味するか。(7)丘陵下位の谷底平野にも６～７世紀の土器片を確認するが、当時の集落、経済基盤はどの程度の規模であったのか。

以上、小規模な調査ではあったが、多くの問題を残している。今後は、八東川下流域の発掘調査により比較・検討を重ねて行きたい。

執筆に際し、田崎和江（岡山大学温泉研究所）先生には火山灰について、小型の成牛と判断される歯については清未忠人（県立博物館学芸員）、松下理一（鳥取赤十字病院歯科医）両先生に、御指導を頂いた。末筆ながら記して感謝致します。

Ｑトレンチにて作業員一同記念撮影

鳥取県八頭郡船岡町
牧野遺跡発掘調査報告書

昭和55年３月19日

発　行　鳥取県八頭郡船岡町船岡５３９
船岡町教育委員会
編　集　鳥取県八頭郡船岡町船岡５３９
船岡町教育委員会
印　刷　鳥取県鳥取市相生町２丁目413
巧印刷